ルシャナの仏国土　二

第二章　アイユーブ警察学校

一. ヴィクトル・ルマール

惑星市民条約機関が改めて惑星全土に共通する太陽暦を定めた年の十月十五日・・・

カルタナの東にあるザクセン自治州タンネン市内、建築家のユルリッシュ・ルマールと妻アンナの間にヴィクトルという息子が生まれた。
この姓から推測される通り、このザクセン自治州というのは、かつてオルニア大陸にあった旧ジョンキーユ王国から逃れて、カルタナに住み着いた五百人ほどの人々の末裔であるが、長い年月の間に、次第にカルタナ民族との混血の数が圧倒し、政治的にも文化的にも、すっかりカルタナ化していた。

ユルリッシュは、建築家として名を馳せていた。カルタナ全土のみならず、オルニアからも依頼を受けて出向くことがある。そんな時は、自らが設計した帆船で出かけたものだ。ヴィクトルは、そんな父の仕事ぶりを見て育った。

ヴィクトル十六歳の時、ユルリッシュはザクセン自治州立図書館の仕事を請け負った。書架のところどころが高くしてある。
「お父さん、どうして書架の幾つかはあんなに高いのです？あれでは、みんなが本を取れません。」
父親は言った。
「あそこは高くなければ美しくない。高ければ梯子を架けて取れば良いのだ。」
ヴィクトルは、その言葉に違和感を覚えた。
「しかし、図書館は市民が身近に使うもの。外観よりも何よりも使いやすいほうが良いのではありませんか？」
「ヴィクトル、お前はまだ一人前ではない。ただ私の言う通りにしておれば良い。建物は美しくあらねばならぬのだ。」

それから半年後、ヴィクトルは蓮の花が美しい人工池の傍を通りかかった。そこから見事な用水路が延びている。それは他ならぬルシャナがまだ特命参与になってすぐの頃に造った池だ。
（ルシャナ様・・・私は貴方のようになりたい。人のためになることをしたいのです。）

四年後の冬、ヴィクトルが二十歳の時に、ユルリッシュは突然息を引き取った。脳梗塞だった。ヴィクトルは、葬儀もそこそこに、父が手がけていた仕事を引き継ぐことになったが、デザインを重視して設計されていた建物を最低限の手直しで使い勝手の良い造りに直すのに苦労した。だが、人々はヴィクトルの建物を賞賛した。

「やっぱり餅は餅屋だねぇ。さすがはルマール先生の息子さんだわ。」
「先生は、良い跡取りをお持ちだった。惜しい方をなくしたな。」
　ヴィクトルは、父の意図を変えたことに罪悪感を感じながらも、結果的には人々が喜ぶ仕事ができることに満足するのであった。

　そんな彼にも、やがて結婚話が持ち上がる。相手は、左官工の親方イニャス・バルビエの長女マルカ。ヴィクトルとは幼馴染みの、少しぽっちゃりした女性だった。彼が仕事を始めてからはあまり会う機会がなくなっていたが、その親方が積極的にお膳立てをしたのである。
「あの子は太っているものですから、嫁の貰い手を探すにも苦労してるんでさぁ。坊ちゃんだったら、見てくれでなく気立てで選んでくれると、あっしは思ってます。」
　イニャスは言った。彼は長年ユルリッシュと多くの仕事をしてきて、家族ぐるみの付き合いだった。
「だけど親方、僕は彼女とは最近あまり会ったことがないですし・・・。」
「それなら、これからどんどん会ってやってくださいよ。毎日お昼を届けさせますから。ね？」
　父親は病気で失った二人の息子たちの分までマルカには幸せになって欲しかった。彼の見るところ、ヴィクトルが最も適任に思えたのである。
「だけども親方、一つだけ問題があるんですよ。」
「ほう？何です？」
「僕は、このまま父の仕事を継ぐつもりはないんです。もっと人の役に立つ仕事に変わるかもしれない。そしたら貧乏になるかもしれない。それでも構いませんか？」
　イニヤスは彼を見て微笑み、やがて笑い出した。
「なーんだ、そんなことですかい。坊ちゃんなら、大丈夫ですって。・・・坊ちゃん、あっしはねぇ、坊ちゃんのお人柄を見込んでるんですぜ。なぁに、うちの子はちょっとやそっとでどうかなるような仕込み方はしてやしません。坊ちゃんとうちの子がその気になってくれさえすりゃ、それでいいんです。」

　春の日の昼過ぎ、ヴィクトルは、マルカをそれとなく工事現場の近くの公園に連れ出した。
「君は料理が上手だね。君の手料理を毎日食べていたいよ。君は、どうなんだ？僕のことをどんなふうに思う？」
　彼は、マルカに優しく尋ねた。毎日手作りの弁当を持って来てくれる彼女に、心を寄せ始めたのだ。
「どうって言われても・・・。ヴィクはヴィクだし・・・。でも、お弁当を残さず食べてくれるのは嬉しいかしらね。」
　マルカは少しはにかみながら言った。俯きがちな一八歳の娘の表情は、ヴィクトルには初めて見せる顔だった。
「なら、こうしたら、どうかな？」
　ヴィクトルは、マルカの唇を盗んだ。彼女は動かなかった。顔が真っ赤になっていた。二人の手が互いの背中に回る。その時マルカは、思いもかけない言葉を口にした。
「ヴィク・・・。今まで言えずにいたけど、実は私ね・・・ずっと貴方に憧れてたんだ・・・。だって、私の周りで、私を相手にしてくれる同世代の男の人は、貴方だけなんだもの。」
「マルカ・・・それじゃ！」
　ふた月後、二人は結婚した。

しかし、二人の間には子供は出来なくなってしまった。一度は妊娠したものの、流産して医師からもう子供は産めないと宣告されてしまったのだ。子供好きで、大家族を夢見ていたマルカは、たいそう悲しんだ。
「ヴィクと大勢の子供たちで、賑やかな家庭を作りたかったのに・・・。」
ヴィクトルは、妻を慰める。
「マルカ、もし君さえよかったら、恵まれない子を引き取ってもいいんだよ。親子三人、食べていくくらいは何とかできそうだからね。」
実際、彼の仕事は軌道に乗り始めていた。使いやすい建築は徐々に評判を得ていたのである。彼もまた父と同じように、カルタナのみならずオルニアにも出張する生活になった。

そんなある日・・・。
ヴィクトルはオルニアの南西部にあたる海沿いの港町で、子供たちが海岸線にある学校で学んでいるのを目にした。町は比較的大きな湾の奥まった場所に位置している。
「あの、もし・・・。学校が何故このような危ない場所にあるのですか？」
訊かれた町民は、きょとんとしている。
「何故って・・・そんなこと言われてもなぁ。昔からここにあるんで。すぐに泳げるし。」
ヴィクトルは、すぐに町長に掛け合った。
「あそこでは、もし津波が来たら危ないですよ！もっと高台に作らないと子供たちが危険です！」
町長は言った。
「だが、町には予算がないんだ。それに、津波が来るとは限らんだろう。」
「それじゃ、金があれば、学校を高台に移転してもいいんですね？」
「そりゃ、まぁ・・・。でも、そんな金、どこにあるんだ？」
「僕が工面します！それじゃ、いいですね！僕は建築家です。設計は任せて、町長さんは大工さん達を集めてください。」
「でも、あんた、なんでそこまでやってくれるんだ？何か目的があるんじゃないのか？」
町長は疑りだした。みすみす何にもならないこんな町に金を出す者など考えられない。
「目的は、子供たちの安全です。命は何物にも替えがたい。僕には子供がいません。これからも出来ません。だから、少しでも子供たちを守りたい。お願いします！許可して下さい！」
町長は、彼の熱意に負けた。それに予算がない町に新しい学校ができれば、結構なことじゃないか。
ヴィクトルは、町の大工達を集めて設計図を見せた。費用は全て彼の持ち出しだった。
新しい学校は高台に建った。小さな町には大きすぎる規模で、そこへの道も広くとってあった。
「さて、学校は何と名付けるかね。ヴィクトル学校か？」
町長は言った。
「いえ。僕は何も要りません。・・・でも、町長さん、これだけは約束して下さい。もし大きな地震が起きたら、すぐに学校に避難するように、皆さんに伝えると。」
彼はそのまま去った。

それから三年後、地震が起きて津波が町を含む一帯を襲った。だが、その町の住民たちだけは学校に避難して全員無事だった。支援と慰問に来た若き皇帝・紫政帝は、町長を褒めた。
「よく犠牲者を出さずに済んだな。」

町長は、皇帝にヴィクトルのことを話して、こう言った。
「この町が救われたのは、その若い建築家のお陰です。お褒めの言葉は、彼にお願い致します。勇気ある建築家、ヴィクトル・ルマールに。」

二. 新しい家族

惑星ルシア全体が「惑星市民条約機関」のもとに王制から皇帝制に移行されて二五年後、オルニアでは初代皇帝の子・田所昭（あきら）が即位して紫政帝と号した。
大地震が発生したのは、その二年後だ。紫政帝は、直ちに緊急対策本部を設け、大陸全土から緊急救助隊、医師や支援物資を手配して自ら陣頭指揮を採っていた。一帯は、地震で家屋が倒壊したり、津波に流されていたりして、まるで跡形もないような状態だった。

ヴィクトルが呼ばれたのは、その緊急対策本部の処理がある程度終わって、当該の県庁に権限が戻ろうかという時節であった。
「ドクター・ルマール、よく来てくれた。」
紫政帝は言った。皇帝もまだ若い。もしかするとヴィクトルと年はあまり違わないのかもしれない。
ヴィクトルは皇帝と同じテーブルに案内されている。皇帝と謁見するとなれば跪くのが普通だが、それが違う扱いをされているのは、おそらく自分がオルニア国民ではないからだろうと彼は思っていた。
「此度の地震は、我が国においても甚大なる被害をもたらした。だが、貴方のお陰で、数多くの尊い命が救われたと聞く。心より礼を申す。」
紫政帝は謝意を述べ、頭を下げた。ヴィクトルを同じテーブルに案内させたのは、心からの感謝の意を伝えるためだったのだ。
「数年前の学校の建築費はオルニアの総意として支払わさせてくれ。少し上乗せさせてもらうつもりだ。
そして、できれば是非とも復興のために、力を貸してもらいたいと思っている。この一帯を災害に強い街づくりの模範としたいのだ。その際も報酬は別途支払う。頼めないだろうか？」
ヴィクトルは快く引き受けた。誰かからの依頼があってもなくても、もとより彼は復興のために、何かしたいと思っていたのだ。
しかしその際、皇帝があまりにもいろいろと尋ねてくるので、とうとう自分たち夫婦にはもう子供が出来ないことや、妻がとても悲しんでいることまで話すことになってしまった。
「どこかで、恵まれない子を引き取ろうかと思っております。」
と、彼は言った。紫政帝は少し考えてから、何やら侍従に指示した。しばらくして、先ほど席を立った侍従が一歳くらいの男の子を抱えて戻ってきた。紫政帝は、自らその子を抱え、ヴィクトルに受け取らせた。
「この子は、別の村で保護されて、ここに来た子だ。残念だが、身元が不明でね。私が連れ帰ろうかと思っていたのだが・・・。
よかったら、君が育ててやってはくれまいか。」
男の子は、ヴィクトルの顔を見て笑った。なんて可愛いんだろう・・・ヴィクトルは心からそう思った。
「紫政帝陛下・・・。この子は、私を見て笑っております・・・。本当に引き取らせていただいてよろ

しいのですか？」
「頼んでいるのは、私のほうなのだがね。
　ただ、この子は本当の名前も分からない。わかっているのは、その上着の一部に天秤の絵が縫い付けられているということだけだ。量り屋の子か・・・。あるいは弁護士の子という可能性もあるが。」
　弁護士は、公平を期すという意味を込めて、しばしば天秤を印に用いることがある。
「天秤ですか・・・。」
　紫政帝は、ひとつの名前を口にした。
「その子の顔立ちや服装から見て、旧総典王国領内の子だとは思われるが、とりあえずライブラと名付けてある。
　元々の意味は天秤だが、その名はこの太陽系の惑星のひとつでもある。願わくば星の加護を受けて元気に育つようにね。」
　この物語の舞台となっているサルナート太陽系には、ルシアの他に七つの惑星がある。ライブラは、その中でも最大級の惑星の名であった。
「ライブラ・・・。」

　カルタナの家に男の子を連れて帰ると、マルカはたいそう喜んだ。なかなか離そうとしない。
「たまには僕にも抱かせろよ。その子は僕の子でもあるんだからさぁ。」
　ヴィクトルがそう言って取り合いになった。
「だめだめ。まだお父さんには任せられませんよーだ！ねーぇ、ライブラ。」
　マルカは、笑いながら子供をあやした。
「マルカぁ！頼むよーぉ！」
　周りの人々は、そんな親子を微笑ましく見守った。

　ヴィクトルの一家は、紫政帝の希望で、オルニアの首都・湯井岡市内から二〇里ほど西にあるカルタナ人居住地域ヨハンシュタット市に移住した。
　被災地の街づくりには、数年かかると思われたし、オルニアからは他の六大陸と行き来する航路が整備されていたため、彼にとってもそのほうが都合が良かったのだ。
　そのうちに、彼は誰からともなく『環境設計家』と呼ばれるようになった。自然を生かし、人にも優しい街並みを造る・・・その姿勢と有効性はとても好意的に評価され、彼の名はオルニア全土に知られるようになったのである。

　翌年、彼はライランカ人が多く住むアリョルカ地域の整備を依頼された。
　そこで、一人の赤子と出会う。その子は、五〇歳くらいの女性に抱かれて移動しているところだった。親子にしては年が離れすぎているので、話しかけて事情を尋ねると、女性は町の保健婦で、その子の両親と兄が事故で亡くなり、女の子はこれから孤児院に連れて行かれるところなのだという。
「もしよろしかったら、私にその子を育てさせてくれませんか？私はヴィクトル・ルマール。環境設計家です。」
　保健婦は、改めてよくよく相手の顔を観察した。その環境設計家の名は知っている。顔を見れば、確かにあの著名な設計家本人のようだ。本当は子供たちのためには、優しい里親を探して育ててもらったほうが良い・・・。

保健婦は、ヴィクトルを保健所に案内して、所定の手続きを済ませてから、藍色の髪をしたその女の子を預けた。どうやら純粋なライランカ人らしい。
「ドクター・ルマール。どうかこの子をよろしくお願いします。名前はカーサルです。」
カーサルか・・・また惑星と同じ名前とは・・・。ライブラのことと考え合わせると、何という偶然だろう。
（ヴィクと大勢の子供たちで、賑やかな家庭を作りたかったのに・・・。）
マルカの言葉が、彼の頭をかすめる。
もしも、この世に運命というものがあるのなら、惑星の数ほどの子供たちを育てるのが僕の運命なのだろうか？そうだ、子供たちを集めて、僕の技術や考え方を世界各地に広めよう。環境保護と世界平和、人類の未来のために・・・。
彼は世界各地を巡って、オルニアとライランカを除く五カ国の孤児院からそれぞれ一人ずつ子供を引き取った。

ただ、ウユニの孤児院から女の子を引き取った時には、高官との交渉を強いられた。ウユニの衛生福祉局長官シャーリプが、自国民の子を国外に出すことを渋ったのだ。
「我が国の国民は、その特徴ゆえに他国では差別を受ける可能性が高いのです、ドクター。」
彼は悲しそうに言った。
「見たところ、子供たちは普通のようですが・・・。」
「子供の頃は何もありません。しかし、その身体は大人になる時に変化するのです。だいたい一五歳か一六歳頃ですが。」
「それでは、その頃までは良いのですね？きっと独り立ちが出来るまでに育てますから。私が子供たちを集めているのは、私の環境設計の技術を広めるためなのです。お国の人たちの為にもなんとかお願いします。」
シャーリプは、ヴィクトルの心を覗いた。彼は類い希なる読心能力の持ち主だったのだ。
「分かりました。貴方を信じましょう。孤児院にいる子供の中から、最も賢い子を託します。くれぐれもよろしくお願いします。」
そしてムームという女の子が選ばれた。

そうして、両親と七人の子供たちはひとつの家族として仲睦まじく暮らすことになった。以下に、その七人の子供たちの出身国と名前を記しておく。

穀倉地帯・オルニアの	ライブラ（長男）
森と湖の国・ライランカの	カーサル（長女）
海洋貿易国・カレナルドの	サラサ（次男）
音楽の国・カルタナの	スイレン（次女）
砂漠のオアシス・マクタバの	ホルス（三男）
科学技術立国・アルリニアの	ルトフ（三女）
不可思議の国・ウユニの	ムーム「四女）

三. 巣立ち

子供たちの部屋には、積み木だの人形だの絵本だのがたくさん並べられている。しかし、散らかってはいない。散らかっていようものなら、ヴィクトルから厳しく叱られるからだ。
「使ったら、必ずきちんと元に戻しなさい。次の人が困るだろ。」

サラサとホルスがふざけて追いかけっこをしている。
「こらーっ！待てー！逮捕するー！」
「やーだよっ！天下の怪盗ホルスが捕まるもんか！」
カーサルが大人ぶって溜息をつく。ルトフとムームは絵本を読んでいる。
「これだから男の子は嫌よね。静かにできないのかしら。」

「まぁ、しょうがないじゃないか。遊べるのは今しかないんだ。」
ライブラが言った。
「なんで？」
スイレンが尋ねる。
「もうすぐ僕たちは学校に入って、勉強しなきゃいけなくなる。父さんから、お前たちはその他にもいっぱい勉強しなきゃいけないんだって、聞いてるんだ。そしたら、今みたいに遊べるかどうかわかんないんだ。」
「そうなんだ・・・。」
ライブラは、スイレンの手を引っ張ってホルスたちのほうに向かった。
「僕たちも遊ぼう！」
その様子を、マルカは見ていた。

「ヴィク、本当にあの子たちに環境設計や剣術まで教え込む気？何だか可哀想・・・。」
「勉強は辛くなるかもしれない。でも、それが将来あの子たちや周りの人々を幸せにすることになるんだ。
マルカ、その時には君があの子たちの心を温めてやってくれ。あの子たちは、きっと乗り越える。」

ヴィクトルは、六年間は普通の勉強を、もう八年間は環境設計学を子供たちに熱心に教えた。剣術は家庭教師を付けた。紫政帝に頼んで、最高の剣術家を紹介してもらったのだ。
「実は、私は忍びの者です。」
その剣術家・佐竹織部は夫婦に言った。ヴィクトルは、忍びが何かを知らなかったので、いろいろ質問した。

忍びの者・・・。それは、あらゆる手段を講じて、偵察や情報操作、暗殺など、人の目に触れてはならない仕事を専門とする影の集団である。剣や槍、弓矢は言うに及ばずあらゆる武器や道具を駆使して任務を遂行する。故に、その存在は皇帝とごく限られた人間にしか知られていない。戸籍も作られることなく、あくまでも秘められた存在のままで一生を終えるのが最終的な使命なのだ・・・。

「つまり貴方は最高の剣術をお持ちであり、皇帝陛下直属の部下なのでしょう？それなら、子供たちの家庭教師には最高だ。どうかよろしくお願いします。」
「ありがとうございます。こちらこそご厄介になります。」
　彼は住み込みで家庭教師を務めた。

　子供たちには、本当に厳しい日々だった。学校のテストで九〇点以上は当たり前、それ以下だとヴィクトルの雷が落ちて、間違えたところを本当に理解できるまで復習させられる。さらに、織部からは剣術の稽古でしごかれる。高学年になると、ヴィクトルから環境設計学の講義だ。
　だが、ヴィクトルは、子供たちに常日頃からこう言っていた。
「愛する子供たち。私がこうしていてやれるのは、お前たちが一五歳になるまでなのだ。
　お前たちが一五歳になった時、私は自分の意思に反してでもお前たちを手放さなければならない。
　だから、その時までに独り立ち出来るように頑張れ。自分の身は自分で守り、環境設計家として各国の皇帝陛下に仕え、その国の人々のためになる仕事が出来るようになっておくのだ。お前たちなら、それが可能なのだから。」
　その言葉を聞く度に、子供たちは父親からとても愛されていることを感じ取るのだった。
　また、母マルカの手料理が子供たちには何よりも楽しみであったし、ウユニ人のムームは成長するにしたがって、心を読む力が増していた。彼女は、両親の心を読んで、他の子供たちに密かに伝えていた。
「お父さんとお母さんは、私たちを本当の子供と同じように思ってくれているわ。でも、一五歳になると、私の姿が変わって周りの人たちから虐められるかもしれないから。だから、その頃までには帰国させるって約束で私を引き取ったみたい。ごめんね、私のせいなの・・・。」
　泣き出すムームを、ルトフが抱く。
「貴女のせいじゃないわ。・・・運命なのよ。」
　ライブラが言った。
「手放すなら、みんな同時に、か。確かにそのほうがいい。父さんは正しいと思うよ。僕たちが頑張れば良いんだ。」

　母マルカは根っからの子供好きに加えて、とても明るかった。そして、誰かが熱を出したりした時には、つきっきりで看病したものだ。
　子供たちが概ね一五歳に達しようかという頃に、ムームが高熱を出した。一晩かけても熱が下がらない。二日目の夜、ライブラが用を足しに起きて部屋の前を通りかかると、マルカがムームのベッドの横でうとうとしている。そこへ、ちょうど別の廊下からヴィクトルが入って来た。
　そのまま見ていると、ヴィクトルはムームの額に手を当てて様子を見てから、マルカの体に毛布を掛けた。
「すまないな、マルカ。ムーム、頑張れよ。こんな時に僕は君たちに何もしてやれん・・・。」
　ライブラは、静かにその場から離れた。
（父上・・・。母上・・・。）
　この頃には、子供たちは言葉遣いも立ち居振る舞いもすっかり大人に近くなっていた。

　ムームの熱は翌朝下がった。念のためにもう一日学校を休んだが、またいつもの猛特訓が始まった。
　しかし、どうも子供たちの様子が違う。より熱心に取り組むようになったようだ。さらに半月ほど様

子を見てから、織部はその理由を訊いてみた。
「君たち、何かあったのかい？前より断然熱がこもっている。」
　ホルスが答えた。
「父も母も、僕たちを本当に思ってくれてますから。期待を裏切っちゃいけないんです。」
「君たち・・・。」
　カーサルが説明する。
「このあいだムームが熱を出していた時、母はずっと傍にいて、そこへ父が来て毛布を掛けたんだそうです。二人にすまないと言って。ライブラ兄（にい）がそう言ってました。」
「はい。その通りなんです、先生。」

　その夜、織部はヴィクトルとマルカにその事を話した。
「そうか・・・。あれをライブラに見られていたのか。気がつかなかった。」
　ヴィクトルは嬉しそうに微笑んだ。
「でも、ヴィク。ムームはそろそろ帰さなくてはいけないのよね。他の子たちも・・・。」
　マルカは泣き出しそうな顔で言った。
「あぁ。もうぼちぼちその時かも知れん。・・・織部さん、子供たちの剣の腕はもう大丈夫ですね？」
「はい。剣術試験を受けたら、恐らく二級は取れます。特にホルス君は先が楽しみですよ。」
「本当にお世話になりました。皇帝陛下にどうかよろしくお伝えください。」
「かしこまりました。それでは。」
　織部は闇へと去った。

　織部がいなくなったことで、子供たちも親元を離れる時が来たことを悟った。
　ライブラが子供たちを代表して言った。
「父上、母上。僕たちはもう行かなければならないのでしょう？ムームは心が読めるのです。父上と母上の心も読んで、僕たちに知らせてくれていました。だから、もう覚悟はできています。」
　ヴィクトルは静かに頷いて、子供たちひとりひとりを見つめた。
「その通りだ、ライブラ。まさかムームに心を全て読まれていたとは思わなかったが・・・。
　だが、君たちが優しく賢く強く育ってくれたことは、私たちにとっても幸せだった。私もマルカも、君たちを愛しく思っている。できればこのままずっと傍に置いておきたいくらいね。
　しかし、どんな出会いにも別れはやがてやって来る。・・・
　十日後、私たちはオルニアを発つ。その時には、ライブラ、先ず君がこの家から巣立つんだ。
　いいか、必ず幸せになれ！私は確かに君たちに環境設計家としての務めを託そうとしている。しかし、何よりも大切なのは君たち自身が幸せになることだ。いつか愛する人ができたら、その人を全力で愛し抜け！務めはその次だ！
　そして、忘れるな。たとえ離れて暮らしても、私もマルカも、君たちをずっと見守っている！」
　マルカが子供たちひとりひとりを抱きしめる。彼女も子供たちも泣いていた。

　旅立ちの日・・・。
「それでは、父上、母上・・・。今までありがとうございました・・・。」
「うん。気を付けてな。また会おう！」

「ライブラ。くれぐれも元気でいるのよ。」
「はい・・・。それでは。」
　他のきょうだい達とも抱き合って別れを告げると、ライブラは湯井岡市の方へ歩いていった・・・。

四. 母の肖像

　惑星ルシアでは、馬車は特別な乗り物ではなく、人力車と同じくらい市民の移動手段として広く普及している乗り物である。機械仕掛けの車は工業地帯で走っている電気自動車や穀倉地帯のトラクター、貨物船と旅客船、それにいわゆる緊急車両だけだ。

　ライブラは、乗合馬車を何度か乗り継いで、二日後に湯井岡市に辿り着いた。ヴィクトルから、まず紫政帝の元を訪ねるように言われていたのだ。
　宮殿・明禅館の入口で、ヴィクトルからの手紙を警護官に差し出す。
「ヴィクトル・ルマール？・・・あぁ、あの環境設計家の・・・。わかった。待っていなさい。」
　警備官の一人が中に入っていった。
（警護官かぁ・・・憧れるなぁ。）
　実は、ライブラは警察官に憧れている。きちっとした身のこなしで人々の安全を守る・・・環境設計家もいいけれど、警察官にもなりたかった。

　宮殿内部は、外観と同じように質素な雰囲気だった。通された所は謁見室だ。
「皇帝陛下は、まもなくおいでになります。」
　案内してきた事務官が言う。彼は跪いて待つ。

　紫政帝は、少し息を切らしながら入ってきた。どうやら小走りで来たらしい。まだ四十そこそこに見える。呼吸を整えながら、彼を見つめた。
「ライブラ・・・だね。」
「はい、皇帝陛下。お初にお目にかかります。ヴィクトル・ルマールの子・ライブラと申します。」
　ところが紫政帝は、ライブラの近くまで寄ってきて、こう言った。
「実は、君と会うのは初めてではないのだ、ライブラ。君をドクター・ルマールに預けたのは私なのだよ。」
「えっ？！」
　紫政帝は、ヴィクトルに彼を託した経緯を説明した。
「それでは、陛下が僕を・・・。どうもありがとうございます。」
「あの時に抱えていた子が、こんなに大きくなったか・・・。
　あれから、私は君の身元を改めて調べさせた。君は地元の子ではなかったため、何年もかかってしまったのだ。
　君の本当の名は、加賀篤史。お父さんがご存命だ。君が来る日をドクターが知らせてくれていたので、もうここに呼んである。・・・加賀君をここへ。」

　一人の男性が入ってきた。凛々しい顔立ちをしていたが、それが崩れる。

「篤史・・・だね・・・。」
　彼は、呆然としているライブラの右袖を捲った。そこにほくろがあるのはライブラ自身も分かっている。
「篤史・・・。お父さんだよ。」
　加賀信頼は、ライブラを抱き寄せた。
「お父・・・さん・・・？」
　ライブラは夢見心地だった。自分がヴィクトルとマルカの本当の子ではないとは知っていても、実の父親と会うことなど予想もしていなかった。
「お前は、お母さんと帰省中に地震に巻き込まれたのだ。お母さんは残念ながら亡くなった。私が現場に着いた時には、お母さんはもう冷たくなっていた・・・。一緒にいたはずのお前は、いなくなっていた。てっきりお前も死んでいるものと思っていたのだが・・・。」
　言葉が途切れた父親のあとを、紫政帝が続けた。
「私はそれと知らずに君をドクター・ルマールに預けた。上衣の柄とお父さんからの情報を照らし合わせて身元が分かった時には、もう八年も経っていてね。
　そのまま君をドクターに育ててもらって、お父さんには待ってもらっていたのだ。きっと、この日を一番心待ちにしていたのは、お父さんだったと思うよ。密かに何度も見に行ったらしい。」
「皇帝陛下、ご意志に背いて申し訳ありませんでした。しかし、一目だけでもと・・・。」
「良い良い。親なれば当然だ。だが、ドクターが子供たちを一五歳で手放すと分かっていたからな。それに、ライブラ・・・篤史自身に動揺を与えるのは良くないと思ったのだ。
　もう何も構うことはなくなった。己が子をしっかり抱いてやれ。篤史の戸籍は復活させておく。
　ライブラ・・・いや、篤史、また会おう。」
　紫政帝は、部屋から出て行った。

　・・・ここからはライブラを篤史と呼ぼう・・・

　信頼は、篤史を自宅に連れ帰った。湯井岡市内のアパートメントの一室だ。
「でも、お父さん・・・僕にはまだ不思議なことがあるんです。」
　篤史は、父親に尋ねた。父は、やっと会えた息子を膝の間に座らせている。
「何だね？」
「僕と一緒に育てられていたウユニの子には心を読む力があって、周りの大人たちのことを全部教えてくれていたのに、僕にはお父さんのことが分からなかった。何故でしょう？」
「あぁ、ムームという子か。」
「知ってたんですか？」
「うん。実はお前を見に行っていた時に、あの子に見つかってしまってね。でも理由を話したら、あの子は敢えて他の子には伏せておいてくれたのだよ。
　それから、佐竹さんという家庭教師。あの人も勘が鋭いね。つまり、私がお前を見に行っていたことを知っていたのは、その二人とドクター・ルマール夫妻だけだった。」
「そうだったんですか。それでは、貴方は本当にお父さん・・・。」
「なんだ、まだ疑っていたのか。大丈夫だ。私はお前の父親、それで正しい。」
「お父さん・・・。」

篤史は、背中越しに伝わってくる父親の温もりをしっかりと受け止めた。

信頼は、一枚の肖像画を息子に見せた。篤史は、それをじっと見つめる。
「篤史、これがお母さんだ。名前は里子（さとこ）。優しい人だった。お前はお母さんに似ている。とってもね。」
「お母さん・・・。」
知らぬ間に涙がこぼれていた。

信頼は、篤史の希望を聞いて、彼を大学の法学部に進ませた。篤史は、やはり警察官になる道を選んだのだ。紫政帝には、こう説明した。
「このまま環境設計家として陛下にお仕えするとなれば、少なからず政界の渦に巻き込まれるでしょう。
しかし私は、そのようなことには向いていないと自分で思うのです。そしてもし権力闘争に負けたら、せっかくの環境設計の技術が無駄になってしまいます。
出来れば、秘密裏に陛下にお仕え致しとう存じます。」
紫政帝は答えた。
「わかった。それでは、君を私の個人的な補佐として召し抱えよう。その際は、ライブラと名乗って明禅館に来るが良い。」

五. 魔の海域

ヴィクトルとマルカは、所有する帆船「セ・アンファン号」で子供たちを祖国に帰すための旅に出た。
ヴィクトルは、その時点で初めてライブラの身元が判明していたことを他の子たちに明かした。
「落ち着いたら、オルニアの湯井岡市で『加賀篤史』という名前を探せ。それがライブラだ。少なくとも紫政帝陛下は行方をご存じのはずだ。私の名前を使えば会える。」

ライランカではカーサルが船を下りた。時の皇帝ホルへに彼女を面会させると、皇帝は直ぐさま彼女を帰化させて、環境局長官ラルフ・カークスキに引き取らせた。ライランカでは、外国に生まれた者は、たとえ両親が共にライランカ人であっても、帰化礼を受けなければ本国では永住することができない。名前も、イリーナと変わった。

マクタバではホルスが、カレナルドではサラサが、カルタナではスイレンが、アルリニアではルトフが去った。残るはウユニ人のムームだけだ。

「ずいぶん寂しくなりましたね、父上。」
ムームが寂しげに呟く。
「いつか、カーサル姉（ねえ）がうるさいって溜息をついていましたが、いざそうなってしまうと悲しいです。」
「ムーム・・・。お母さんも、貴女を手放したくはないわ。お母さんね、大家族が好きだったの。だから、とっても楽しかった・・・。思い出をありがとう・・・。」

マルカが優しく抱きとめる。
「ムーム、君ともお別れだ。元気でいるんだぞ。」
ムームはヴィクトルにもしがみついた。
「父上・・・。お名残惜しゅうございます・・・。今まで、ありがとうございました。ムームは幸せでした・・・。」

ウユニ皇帝・バマカンは、引退した元衛生福祉局長官シャーリプの希望により、彼と面会した。彼の手を通して、ヴィクトルからの手紙を読む。
「すると、ここに書かれているムームという子は、環境設計家の卵なのだね。」
「御意。ドクター･ルマールは、その時の約束を守って、その子を覚醒前に帰してくれたのです。今は、拙宅にて過ごしております。陛下のお許しがあれば、ぜひとも我が娘としたいと思っております。何卒お許し下さいますよう。」
「そうか。先が楽しみだな。時折地形が変わってしまう我が国には、まだそのような学問はない。養女の件は聞き届けて使わす。」
「は。有り難き幸せ。」

ムームの身体に変化が起きたのは、その年の冬だった。シャーリプの妻・エンネアが見守る中で、彼女の耳は狐になり、ふさふさした尾が生えた。
「ムーム、貴女も獣族になったのね。」
エンネアもまた半身狼の獣族だった。耳や牙、尾を持っている。
ウユニ人たちは、成長すると、遺伝に依らず霊族、竜族、魚族、鳥族、獣族などに変化する。そのうちのいずれになるかは、覚醒してみないと分からない。混合した形の者もいる。特殊能力も、テレパシー、テレキネシス、読心力、千里眼、飛行、落雷、空間操作など様々である。

そのムームが、シャーリプの息子・カンゼノと結婚したのは、それから五年後のことだ。父親が喜んだのは、言うまでもない。
「カンゼノよ。浮気などしてみろ。ムームはたちどころに見破るぞ。怒らせると母さんくらい怖いからな。」
ムームは顔を赤らめた。
「お、お父様・・・お戯れを・・・。彼に限って、そのようなことは・・・。」
カンゼノは新妻を庇った。
「そうですよ！私はムームを愛してます！血の繋がりのない妹から、かけがえのない妻に変わったのです！彼女を傷つけるようなことは言わないで下さい！たとえ父上といえども、許しません！」
息子の見幕に父親は圧倒された。
「すまんすまん。冗談のつもりだったのだが。許せ。」
ムームは幸せな生活を送りながら、その数年後には正式に環境局長官に就任して、国土の一層の発展に寄与した。

ムーム二八歳の冬のある日、一艘の帆船が遭難、生存者は発見できず、との情報が入った。そこは地元のウユニ人たちでさえ魔の海域と恐れるタルカンマ海峡だ。船名を知ったムームはうろたえた。

「これは！父上の船？！」

　ムームは、直ぐさまオルニアの兄・篤史に電報を打った。当時オルニア警察庁所属の警視になっていた篤史は、他のきょうだい達に集合するように伝えた。

　ムームは、運び屋にテレポートで運んでもらって、指定の日時に待ち合わせ場所の森の広場にやって来た。人気のない場所の一角で、ベンチに腰掛けている男が二人いる。
「兄上？兄上、ムームです。」
　二人は顔を上げた。
「ムームか。ライブラだ。」
「俺はホルス。お前、まるで狐みたいになったな。」
　他の四人も間もなく合流した。
「それで、父上たちが遭難したというのは、確実なのね？」
　カーサルが尋ねる。
「はい・・・。私も現場に近い浜辺で船の残骸を見せてもらいました。父上たちの船に間違いありませんでした・・・。打ち上げられた人たちの中には、父上も母上も見つからなかったけれど、あの海が荒れて助かった例はないと・・・。」
　ムームは声を詰まらせ、一同は静まり返る。ルトフやスイレンは泣き伏した。男たちも涙をこらえている。
　やがて、カーサルが二人の墓標を作ろうと提案した。一同は賛成して、役割を割り振った。
　それから、めいめいが自分の今を語った。・・・

六. ライランカの姫君

　十年後・・・。

　オルニアの紫政帝は、隣国ライランカのファイーナ姫から一つの依頼を受けた。二年間で後継者を育成したいという内容だ。
　ライランカのアルティオ帝のひとり娘・三一歳のファイーナ姫は、今年に入って不治の病とされるグナンリラ病で余命五年との宣告を受けていた。自ら子を産み、育てられる時間はもうない。ならば、若者たちを育成して後を継がせるしかない、と考えたのである。
　そして、できればそれは、彼女を皇女だとは知らずに、素顔で接してくれる若者たちの中から選びたい。それには、人口が多く、ライランカの文化に馴染める可能性が高いオルニア人が最も適しているのではないか・・・。そのように思って、彼女はオルニアを訪れたのであった。
　父帝も、限りある命となった娘との時間を惜しんだが、公のためにはやむを得まいと了承してくれた。

　そういうわけで七月一二日の今日、ファイーナはオルニアの港町に降り立った。ライランカ人独特の藍色の髪をゆるやかに束ね、左手にキャンバス地のトランクを下げている。
　紫政帝とその皇太子の田所風馬が、彼女を迎えに来ていた。
「ファイーナ姫、ようおいでになった。」

「紫政帝陛下、風馬殿下、お久しぶりでございます。ご健勝で何よりと存じます。そして、このたびのご厚意には感謝してもしきれませぬ。
　されど、ここでは『ファイーナ』の名は・・・。」
「おぉ、そうであったの。すまぬすまぬ。さて、なんと呼ぼうかのぅ。まずしばらくはゲストルームにご滞在くだされ。その間にゆるりと事を進めればよい。」
「どうもありがとうございます。」

　翌日から、ファイーナと紫政帝、風馬皇太子は夕食を共にしながら今後について話すようになった。
　まずファイーナはオルニアにいる間、ソフィアという名を名乗ること。オルニアには移民戸籍制度が設けられていて、犯罪に利用されないと認められれば、新たに戸籍を作ることが出来る。これは、民族的迫害を逃れて他国に逃げてきた人々の救済を目的に、かのルシャナが考案したものの一つであり、世界有数のオルニア穀倉地帯は、それを実現できる余裕を有している。実際に、オルニア国内には他国からの移民で構成されている市や町が幾つか点在している。

「後継者育成の場として、警察学校を検討しているのじゃが、如何かな？」
　紫政帝は言った。
「実は、かねてより警察官の質を上げようと考えておりましてな。貴女もその中で講師をしながら後継者を見つけられたら宜しかろうと存ずる。」
「どうもありがとうございます。どうか陛下のおぼし召しの通りに。何卒よろしくお願い致します。」
　ソフィアは同意した。正義を守る警察官の中から将来の皇帝を生み出せれば、それに勝ることはあるまい。

　紫政帝にとっても、より高度な警察官を育成できるまたとない機会となる。
　犯罪者たちの中には、腕の立つ者たちがいる。殉職する警察官も少なくない。それ故に、かねてから高度な警察学校の創設を考えていた。
　また、領内には忍びの者たちが存在する。戸籍すら持たない彼らを、数年前にようやく解放できたばかりだ。よもやとは思うが、これから犯罪に手を染める者が彼らの中からも出ないとは限らない。それと同等かそれ以上の力を持つ警察官が欲しかった。

　こうして、ソフィアは警察庁において近く行われる高等警察官資格試験を受け、警視の資格を取ることになった。もちろん、その時にはソフィアの身分は隠されて厳正な審査が行われる。
　高等警察官資格試験の前夜、模擬試験の復習をしていたソフィアは、ふと窓から空を見上げた。満天の星が輝いていた。

七. 再会

　「さて、と。」
　面接試験で口火を切ったのは、加賀篤史警視正だ。
　高等警察官資格試験は、筆記試験と剣術試験、それに面接で合否が決められる。幼き頃より将来の君主となるべく育てられてきたソフィアは、三級剣士の資格も取っていたし、法令関係の試験は容易かっ

た。問題は如何にして面接を突破するかだけなのである。
　面接官は五人いて、うち一人は女性だった。

「筆記試験は満点ですが、あなたはなぜライランカからわざわざいらしたのですか。」
　篤史から矢継ぎ早に質問が飛ぶ。
「はい。今回は皇帝陛下が新しく警察学校をお作りになると伺い、一人の法律家として、どれだけ司法に貢献できるかを実践したいと思いました。」
「そのお話は、我々も聞き及んでおります。ですが、警察官と法律家とは、少し異質な性格を持つ職業だとはお思いになりませんか。」
「いいえ、警察は市民も犯罪者も、そしてもちろん自分の命も守らなければ、使命を果たしたことにはなりません。法律家もまた、一人でも多くの命を救うために法律を作り、常に走査し続けるのです。また、現場を知らずして机上でのみ法令を作ったり論じたりするのは、無意味ですわ。今回の警察学校は、すべての点において最高を目指されるとか。このような貴重な機会に私もぜひ参加させていただきたいのです。」
「なるほど、よくわかりました。それでは後ほどまたお呼びします。」
　同席していた女性警視・大谷好子は、篤史の質問の仕方に違和感を覚えた。今日はいつになく厳しいのだ。
（普通は、これほどまでには突っ込んだりしないのに・・・。彼でも機嫌が悪い時があるのかしら。でも、そんな風には思えないし・・・。何だか変ねぇ・・・。でも、今日の彼女はそれに見事に対応している。凄い人だわ。）

　二時間後、ソフィアが好子に促されて更衣室に入ると、彼女と同じ制服を渡された。
「これは・・・。」
「そう、あなたは合格したの。今日から私たちは仲間。私は大谷好子、貴女と同じく警視よ。よろしくね。」
　好子は小さくウィンクしてみせた。
「ありがとうございます。ソフィア・テジェスです。よろしくお願いいたします。」

　程なくして、先ほどの面接官たちと皇太子の立ち会いで、簡単な任命式が執り行われた。風馬は微笑んだ。
「合格おめでとう！期待しているよ。」
「は！」
　ソフィアは敬礼した。
　そのきちっと型にはまった清々しさに、風馬は内心、さすがは姫君だと感心した。これまでは互いに将来皇帝となる者として外交的な親睦を重ねてきた。少し年上の彼女は、彼には眩しく映っていたものだ。

　その夜、ソフィアは皇帝の謁見室に喚ばれた。それまでの打ち合わせの場とは明らかに異なるし、公式な謁見にしては夜という時間帯は不自然である。
「合格おめでとう。」紫政帝はにこやかに迎え入れた。

「ありがとうございます。」ソフィアが応える。
「実は会わせたい者がおって、来てもらいましたのじゃ。・・・おはいり。」
「はっ、失礼つかまつります。」
　比較的薄い中扉を開けて一つの人影が現れる。
「あなたは・・・。」
　彼女は息を呑んだ。声の主は、加賀警視正だったのだ。

「ファイーナ姫さまには、実に聡明でお美しくご成長あそばされましたね。」
　篤史は跪いた。その目は彼女が昼間見ていた厳しい眼差しとは違う。懐かしい者をみつめるような優しいものだった。
「あなたは私のことをご存じなのですか？」
「もう一五年ほど前になりましょうか、お目にかかったことがございます。ヴィクトル・ルマールの子・ライブラとして。」

　紫政帝が言った。
「実は、件の警察学校の校長をこの篤史にやってもらおうかと考えておりますのじゃ。いかがですかな、姫。」
「え・・・。あ、はい、私はかまいませぬが。しかし、確か、ドクター・ルマールは環境設計学を極めたお子様達を各国に補佐役として置かれたと伺っております。そんなお国の大切な方を・・・。」
　ライランカでは、イリーナと名を変えたカーサルが環境局長官となって環境をよく整え、皇帝の参謀と呼ばれている。ソフィアも、そのイリーナから、ドクター・ルマールについて多くを聞いていた。篤史ことライブラもおそらくオルニアにおいて欠くことのできない存在になっているに違いない。

　紫政帝は言葉を続けた。
「姫、この度作る警察学校は、殉職する警官をなくしたいという私自身の願いでもありますし、惑星全体の利益にも適います。そして、この国でそれを任せられるのは篤史しかいないのです。」
　篤史も熱い思いを語る。
「私は、父から環境設計学を教わり、皇帝陛下にお仕えしてきました。しかし、環境設計学は必ずしも国全体のためにあるものではありません。警察官達にも身につけてもらって、社会の治安に役立てることも可能だと思うのです。
　さらに、たいへん不躾な言い方をお許し頂けるならば、紫政帝陛下も風馬殿下も、既に私の知識を充分に吸収されておられます。私がお二人にお伝えすることは、もはやほとんどございません。
　これからは、警察学校の校長というお役目を果たしていく所存でございます。それに加えて、姫様、貴女様をお守り致します。」
　紫政帝も篤史も、ソフィアに力強く頷いた。思いはひとつなのだ。
「どうもありがとうございます、紫政帝陛下、加賀警視正。」

　紫政帝はすでに幾人かの教官役を揃えてくれていた。
　国立科学研究所に勤務している、科学技術立国・アルリニア出身の周公沢、言語学者・小久保美穂、忍びの里から来て戸籍課に勤務している春野亜矢、そして剣術の家元の家系に生まれた警察官セルジオ

・カルルと滝田光昭という顔ぶれだ。
　公沢は科学捜査の講義を、美穂は人とのコミュニケーションの講義を、その他三人は武術系であり、それにソフィアの法律学と篤史の環境設計学が加わる。

八. 新たな出会い

　それからしばらくのあいだ、ソフィアは非番になると明禅館に来る篤史とも話し合うようになった。
「私が加賀篤史という名前で呼ばれるようになったのは、ヴィクトル・ルマールの元を離れてからです。」
　彼は、母親と帰省していて大地震に巻き込まれ、ヴィクトルに引き取られたこと、巣立ってから紫政帝のお陰で実の父親に会えたこと、彼が三一歳の時にルマール夫妻が遭難したことなどを話した。実父は、息子が警視正にまでなったことを見届けて安心したかのように、五年前に膵臓がんで亡くなっていた。
（お前に会えて、何年も一緒に暮らせたことを幸せに思っている。ありがとう、篤史・・・。）
　それが最期の言葉だった。
「私も母を亡くしています。・・・貴方のお父様たちも、思い出となって今でも見守って下さっていますよ。」
　ソフィアは言った。彼女の胸の中にも、亡き母が今も生き続けているのだ。
「ありがとうございます、姫様・・・。」
　篤史は、深く頭を垂れた。

　二人は、来たる警察学校開設に向けて、廊下側がガラス張りになっている会議室で打ち合わせを重ねている。
「お願いですから、姫様と呼ぶのはお止め下さい。誰かが聞きつけるかもしれませんわ。どうかソフィアと。」
　ソフィアが懇願した。皇帝候補が決まるまで、自分の身元は決して明かされてはならないのだ。
「分かりました。・・・では、ソフィア警視、開校まで二人で手分けして、これはと思う人を探そう。」
　篤史はそれ以降、警視正として部下の警察官に接する時の言葉遣いになった。

　戸籍係に勤める春野亜矢と面談したのは、打ち合わせ三日目のことだ。亜矢は、彼女と会うなり、その場で跪いた。
「ファイーナ様でいらっしゃいますね。春野亜矢と申します。私は忍びゆえ、姫様のお顔は存じ上げております。何卒よろしくお願い申し上げます。」
　ソフィアは驚いた。
「忍びの者たちのことは承知していましたが、他国の王族まで知っているのですか。」
「はい。数年前までは各地で情報収集もしておりましたので。私の元の名は楓と申します。
　この度、紫政帝陛下より、警察学校の講師を命じられました。」
「そうですか。よろしくお願いしますね。ところで、貴女はどうして戸籍係に？」
「実は、生き別れになっている許嫁を探しているのです。たまたま皇帝陛下にお目にかかる機会があり、それでは許嫁が立ち寄るかも知れぬ戸籍係に勤める気はないかと言って下さいまして。」

「そうですか。会えると良いですね。きっと素晴らしい方なのでしょうね。それで、その方のお名前は何と？」
「は。どうもありがとうございます。彼の名は隼と申します。」
「私からも、ライランカの父に問い合わせておきましょう。まさかライランカにはいないと思うけれど、もしかしたらということもありますから。
　そして、亜矢さん、これからは私のことはソフィアと呼んで下さいね。」
「畏まりました・・・ソフィア警視。」
　彼女は立ち上がり、深く一礼した。

　篤史が思い立って尋ねた。
「ところで、春野君。佐竹織部、或いは梵天という名に聞き覚えはないか？」
「何故その名を？！その者は、津沢衆の長（おさ）の三男です。私ども神部一族の好敵手ですわ。どうして警察官の貴方がご存じなのです！」
　亜矢は、思わず語気を強めた。一般市民が忍びの名などおよそ知っているはずがない。
「そうか。君とは違う一族だったのか。彼は、私に武術を教えてくれた恩人でね。できれば会いたいと思っているのだ。だが、紫政帝陛下は教えて下さらない。」
「そうでしたか。しかし、今は誰もそれぞれの居場所を知ることはできません。私ども忍びは、数年前の解散同化令のあと、それぞれ散っていきました。同じ一族内でも殆どが行き方知れずなのです・・・。」
　亜矢は、許嫁を思い出した。
「すまん。辛いことを訊いてしまったようだね。許嫁でさえ行方を探しているのだから、無理だったよね。」
　篤史は、はっとして謝った。亜矢は、それと察して話題を変えた。
「良いのです。どうかお気になさらないで下さい。
　しかし、そうだとすると、警視正は忍びの技をご存じなのですね。どうですか、お手合わせをお願いできますか？」
「いいとも。」
　二人は武道場で竹刀を打ち合った。ソフィアは、その立ち会いの迫力に圧倒される。
「なるほど。普通の剣術にはかなり近くしてありますが、忍びの剣ですね。それも津沢衆の。懐かしゅうございます。」
　亜矢は、息を切らすことなく言った。一方、篤史のほうは精も根も尽き果てている様子だ。
「強いな。紫政帝陛下が推薦されるだけのことはある。期待しているよ。ふぅ・・・。」

九. 警察官の資質

　それからソフィアと篤史は、私服で街中に出て、訓練生候補を探し始めた。

　「うわーんっ。」
　街角で小さな子が泣いている。
　「もうっ、どうして泣くのよ！おかあさん、もう知らないわよ！いっつもこうなんだから！」
　母親らしい女性は、ガミガミ言うばかりで、それがもう数分も続いている。

　ソフィアが見かねて一歩踏み出そうとしたとき、それより早く行動を起こした人物がいた。その人影は、ゆっくり女の子に近づいて、目の高さを合わせるようにかがみ込んだ。

「まあまあ、おかあさん。そんなに大きな声ばかりでは、お嬢さんが怖がるばかりですよ。だから泣くんです。・・・お嬢ちゃん、君のママはお嬢ちゃんが嫌いで怒ってるんじゃないんだ。安心して良いんだよ。」

　それから、青年は母親にそっと言った。
「お嬢さんをただ抱きしめてあげてください。」
　母親が抱きしめると、泣いていた女の子の声が「ひっくひっく」に変わり、やがて静かになった。小さな温もり・・・母親もいつしか泣いていた。
「ごめんね・・・ごめんね。・・・」

　彼は静かにその場を離れて、広場の片隅に腰掛けた。周囲には絵筆や絵の具やパレット、近くのイーゼルには白い紙が置いてある。
「あなた、絵描きさん？」
　ソフィアが青年に声をかけた。
「はい、そうですが。」
「じゃあ、よかったら私も描いていただけるかしら？」
「もちろんですとも。」

「失礼ですが、ライランカの方ですか？」
　彼は鉛筆で輪郭線を描きながら尋ねた。
「えぇ、ここへは仕事で来ているの。実は、今日これから髪を切りに行くんです。だから記念にと思って。」
「ライランカの方の髪の色、好きなんですが難しいんですよね。」
「ありがとうございます。そう、この色がねぇ。」
　確かに以前からライランカ人の髪の色を普通の絵の具で再現するは難しいとは聞いていた。
「そういえば、そういうことも聞いていますね。ところで、あなたは学生さん？」
「いえ、もう卒業しました。でも、食べていけなくて。こんなところでアルバイトですよ。」

　似顔絵が仕上がった。
「素敵ね。こんなに美人に描いてくれて、どうもありがとう。」
　ソフィアは彼に千リンクを渡した。
「えっ、こんなにたくさん・・・。こちらこそ、どうもありがとうございます。」

「ねぇ、良かったらなんだけど・・・貴方、警察官になってみない？」
「え、え、なんですか、藪から棒に・・・。」
「実はね、いま警察学校の生徒を集めてるの。さっき女の子とお母さんを助けたでしょ。貴方には警察官の素質があるなって思ったわけ。学校は厳しいけど、お給料も出るし、非番の日もあるから、絵も描

いていけると思うのだけれど、どうかしら？私はソフィア・テジェス。副校長なの。」
「それじゃ、婦警さんなんですか！こりゃあ驚いた！それに、あれ見られてたなんて。」
　彼は顔を赤らめた。
「もちろん今すぐにとは言いません。気が向いたら、十月七日の月曜日、午前十時にアイユーブ警察学校の前まで来てください。ところで、あなたお名前は？」
「僕、藤原景時といいます。」
「とても良いお名前ね。それじゃ、待っています。」

　ソフィアが去ってしばらくすると、さっきの親子がやって来た。
「先ほどはどうもありがとうございました。私、いつの間にか自分の忙しいことをこの子に押しつけていたような気がします。抱きしめてわかりました。」
「そうですか・・・。あ、少し待っていて下さいね。・・・さぁ、できた。」

　景時は簡単な花の絵を描いて女の子に手渡した。
「ありがとう。」
　女の子は嬉しそうに受け取って、母親に見せた。もう大丈夫だ。
「あ、お代を・・・。」
「いいえ、これはお嬢さんへのプレゼントです。さっき、多めに払ってくれたお客さんがいましてね。僕としてはこれで埋め合わせになるんですよ。」
「そうですか・・・。では、お気持ちをありがたく頂戴します。その代わりになるかどうかわかりませんが、これはうちで焼いたパンです。どうぞ召し上がってください。」
「ありがとうございます。では、これはいただきますね。」
　彼は小さな紙包みを受け取って、中を覗いた。
「やぁ、こりゃあ美味しそうだ。どうもありがとうございます。」
「本当にありがとうございました。」
　母親は頭を下げて帰って行った。
「バイバ～イ！」
　少し遠くから女の子が手を振った。

　僕って今日、良いことをしたのかな・・・。景時はぼんやり考える。あの綺麗な婦警さんは、僕が女の子とお母さんを助けたと言っていた。確かに見ていられなくて声を掛けたのだけれど。ただ、当たり前のことをしただけなのにな・・・。

「それは君、その人が言うのが正しいよ。」
　アパートの管理人が言った。彼は民間警備会社を定年退職して、管理人になっていた人物である。
「私だって、できれば正式な警察官になりたかったんだ。でもあいにくとその年は希望者が多くてね。それに、君がしたことは、泣いていたその子だけじゃなくて、忙しさに我を忘れていたお母さんのことも救ったことになる。君だって、本当はそれを分かっていてそうしたんじゃないのかね？
　君は、心で人を救えるんだ。そんな君がならなくて、誰が警察官になれると言うんだ。とにかく、やってみろ。」

十. 通り雨

ソフィアは夕飯を食べに商店街へ出かけた。
警察学校の開講までまだしばらくあったが、そういつまでも宮殿のゲストルームに居続けるのも不自然なので、とりあえず週決めの宿に移ったのだ。宿でも朝夕の食事は出してくれるのだが、時折は夕方や宵の街にも出てみなければ、人材は見つけられない。

と、今まで晴れていた空が、一天にわかにかき曇って雨が降り出し、雷鳴が轟いた。
人々は慌てて屋根のある場所に走って行く。ソフィアも駆けだした、そのときだった。一頭の馬が彼女や他の人々のところへ走ってくるのがちらっと見えた。
「あぶないっ！」
黒い影が彼女の腕を強く引き、その勢いで彼女は斜め後方の地面に転がった。というよりも、その何者かがわざと彼女を転がして、馬の進路から外してくれたように思われた。
黒い影はそのまま馬の背に飛び乗ると、どうどうと馬を静めて、人々がいる直前で馬を止まらせた。

一瞬の後、人々の間から拍手が湧き起こった。ソフィアも立ち上がってその人物を見ると、二十代後半くらいの若い女性である。
「助けてくださって、どうもありがとうございました。」
ソフィアは礼を言った。
「いえ、咄嗟のことで・・・。大変ご無礼申し上げました。どうかお許しください。どこもお怪我はなさってませんか。」
「え？」
ソフィアは一瞬考えた。ご無礼とはどういうことか。もしかしたらこの人は私の素性を知っているのではあるまいか。そして、あの身のこなし、ただ者ではない・・・。
「あの・・・私、ソフィア・テジェスと申します。よかったら、お礼にお夕飯ご一緒してくださいませんか。」
相手は少し考え込んだ様子だったが、お断りするのもまたご無礼だからと承知した。

彼女は和菓子屋でアルバイトをしているということで、ソフィアはその仕事が終わるまで喫茶店で待っていた。
時間通りに彼女はやって来た。半ば息を弾ませている。軽い食事を注文しながら、彼女は席に座った。
「あら、走ってらっしゃったんですか？」
「お待たせしてはと存じまして。」
「あの・・・あなたは私にとって命の恩人です。それなのにどうしてご無礼という言葉を私にお使いになりますの？」
彼女は「あ」という顔をして、ソフィアを見た。
「やはり思っていることはことは言葉に出てしまうものですね。・・・実は私は忍びの者で、名を桔梗と申します。私どもは高貴な方々のご尊顔をすべて存じ上げております。姫様のことも、しばらく前から気が付き、それとなく拝見しておりましたところ、先ほどのことが起こりました。」

「そうでしたか。やはり私のことをご存知だったのですね。改めてお礼を言います。」
「勿体のうございます。それに、どうかそのような丁寧語はおやめくださいますよう。・・・それから、先ほどの馬は、雷鳴に驚いて暴走したのだそうです。あとから馬車屋が商店街を謝って回っておりました。」
「なるほど、あの馬はそれで・・・。何にしても、被害がなくてよかった。あなたのおかげです。ところで、あれは合気道？」
「はい。左様でございます。」
　良い腕前をしている。もしかしたら、この人も良い警察官になるかもしれない。

「解散令のことは知っています。貴女も町に出て来たのですね。」
「はい。数年前の解散令で、忍びの者たちはすべての立場を解かれ、一般市民となりました。私も、今井はるかという名前になりましたが、先祖たる忍びたちが行ってきた殺戮の歴史の償いに、今度は人を救っていきたいと思っています。だからお金を貯めて、薬科大学に入ろうかと。」

「そうですか。でも、もしお金を貯めなくても人を救える職業になれるとしたら、他の職業でも構わない？」
「え？」」
「実は、私が今ここにいるのは、最高の警察学校の指導官や訓練生を見つけるめなの。そこでは、実技訓練に忍びの技も教える予定で、貴女は講師兼訓練生として適任だと思うのです。
　でも、そうはいっても、あなたたちならすぐに察しがついてしまうかもしれないわね。私にはもうひとつ別の目的があります。私は短期間で自分の後継者を育てなければなりません。あくまでも秘密裏にね。」
「そうだったのですか。」
　はるかも、ライランカのファイーナ皇女が余命宣告を受けていることは耳にしていた。つまり皇女が言う『後継者』とは、ライランカの次期皇帝のことなのだ。
「警察官も人を救える職業よ。それに、さっきの合気道も含めて、あなたの技は薬剤師で埋もれさせて良いものではないと思うの。どうかしら？あ、これはあくまでも提案です。もしよかったら、十月七日の朝十時にアイユーブ警察学校の前に来てください。」
「わかりました。考えさせていただきます。」

　食事を終えて、帰り際にソフィアはふと思い出して言った。
「そうそう、忍びだった人がもう一人いるの。正式な名前はもう一般市民だけど、たしか昔は楓とか。」
　はるかの顔色が変わった。
「楓が・・・。楓に会えるのか・・・。」

　あれはもう十年近く前になる。
　ある日、はるか達が住む忍びの里全域に皇帝から集合命令がかかった。
「皆の者、これからわしの言うことをよく聞いて欲しい。・・・今日ただ今より皆の『忍び』の身分をすべて解き、改めて戸籍を作成して一般市民とする。その上で、各々好きな職業に就いて欲しい。
　先祖代々、これまでの務めはさぞ辛かったことであろう。皇帝として、為政者として、今日までそな

たたちをその苦しみから解放することができなかったこと、心から詫びる。」
紫政帝は数分間にわたって深く頭を下げた。人々の間にどよめきが起こった。
桔梗も、幼なじみの楓と顔を見合わせた。本当に・・・？しかし、皇帝自らがあのように深々と頭を下げている。嘘偽りではあるまい。

その数日後、いくつかあった村は解体され、人々も思い思いに散っていった。あの日から桔梗と楓はお互いに居場所がわからなくなったままなのだ。

一一. 手のひら

その日、ソフィアと篤史は、アイユーブ警察学校の正門前にいた。
開講まであと半月の今日から、二人はここに住み込んで、篤史と入れ替わりになる校長や、事務方をはじめとする職員たちと打ち合わせや仕事の引き継ぎを行うのである。
校長はルカイル・アフマド・ハッサンという、当地出身の女性警視正である。少し日に焼けた、小柄で少しだけふくよかな容姿は、会う者に安心感を抱かせる。
そもそもアイユーブ警察学校があの計画の場になったのは、七〇歳になる彼女が体力の衰えを理由に退官を願い出たタイミングと計画開始とがたまたま一致したからなのだが、その瞳はまだ輝きを湛えていた。

「加賀警視正、お久しぶりです。こちらは副校長になられる・・・？」
「ご無沙汰しておりました、ルカイル警視正。こちらはソフィア・テジェス警視。」
「ソフィア・テジェスです。」
「ライランカの方ね。よろしく。お二人がいらっしゃる頃を見計らって、みんなに集まってもらってます。講堂のほうへどうぞ。」
ルカイルは手を差し出した。七〇歳になる彼女の手は柔らかく温かかった。そして何故か一点の光のようなものが感じられるのだった。
ソフィアはふと亡き母を思った。母上も温かい手をしていたっけ・・・。

ソフィア――ファイーナ皇女――の母・カナリア妃は、小柄で細い体つきをしていたが、誰の子でもまるで自分の子のように親しく話しかけたり叱ったりしたので、宮殿職員からも一般市民からも慕われていた。
その母は、ファイーナが十歳の時に心臓発作で突然この世を去った。葬儀の日、父は冷たくなった妻と泣きじゃくる娘を抱きしめて泣いた。
「カナリア、お別れになるんだね。・・・人の命は本当に儚いものだ。少しでも何かバランスが崩れると死んでしまう・・・。だが、その儚さの故に人は誰もが美しく、尊い。ファイーナ、おまえの母も優しい人だった、美しかった、そのことは決して忘れるな。」

ルカイル、篤史、ソフィアの順に講堂に入ると、多くの視線とかすかなざわめきが感じられた。
「みんな、こちらが後任の加賀警視正とソフィア警視です。私と同様にどうか助けてあげてくださいね。加賀警視正とは旧知の間柄だけれど、公明正大で優しい方よ。それでは加賀警視正、どうぞ。」

篤史が進み出た。
「初めまして、職員の諸君。加賀篤史と言います。今回、縁があってこの学校の校長を務めることになりました。これまでもそうであったように、これからも警察官の役割は大きくなっていくでしょう。だからこの学校を、その礎を築く存在にしていきましょう。そしてそのためには皆さんの力が必要なのです。どうかよろしくお願いいたします。」
続いてソフィアが紹介された。
「皆さん、こんにちは。ソフィア・テジェスです。私は、ご覧の通りライランカから来た者で、もともとは法律家です。同じ法を守る者として共通するところは多いと思いますが、警察官としての実務は経験していません。この学校でいろいろ学ばせていただければと思います。」

それから、ルカイルは校内を案内してくれた。校長室、会議室、経理課、調理場と食堂、教室、武道の稽古場、男子寮と女子寮など、いずれも掃除と整理整頓がよく行き届いている。
「生活の乱れは心の乱れです。心が乱れると事故やミスが起こりやすくなります。私は長年そういう指導をしてきました。お二方にもそれはぜひ受け継いでほしいと思います。幸いにして、この地域には一日三回の礼拝が根付いています。礼拝は神との対話をするだけではなく、心の時間を取り戻してくれるものですから。」
「たしかにそうですね。ルカイル警視正のお考えに賛同します。」篤史が応えた。

ルカイル警視正はこれまで温かい包容力と厳しさの両輪でこの学校を率いてきたのだ、とソフィアは思った。
気がつくと、警察学校の空に夕焼けが広がっていた。

一二. 希望

ソフィアが新しく設けられた副校長室で資料を並べていると、事務係のアブドフがドアをノックして入ってきた。
「ソフィア警視、ご面会の方がいらっしゃってます。今井はるかさんという方です。」
「あ、彼女ね。わかりました。お通ししてください。」
総招集の日まではまだ日があるが、講師を引き受けてくれるのだろうか、それとも断られるのだろうか。

「姫様にはご機嫌麗しゅう存じます。」
はるかはまず跪いて礼をした。
「はるかさん、来てくださったのは嬉しいけど、ここでは私は王族ではありません。どうぞ普通になさって。ソフィア警視と呼んでください。」
ソフィアは親しげに微笑んだ。
（あぁ、この方も女将さんみたいにお優しいんだ。）
はるかは思った。それまで務めていた和菓子屋の女将もよくしてくれたが、彼女の微笑みと同じなのだ。

和菓子屋に入るとき、はるかは自分が忍びの者で解放されて街に出てきたことを和菓子屋夫婦に伝えた。こんな私でいいのでしょうかと。
大将は言った。
「これまではこれまで、本当に大切なのは、これからさ。それにあんたは綺麗な目をしている。惚れそうなくらいな。」
「あんた！」女将がたしなめた。
「あ、いやいや、手を出すとかそんなんじゃねーよ。ただ、この人にはハキハキしたものを感じるんだよ。」
「それはあたしも思うね。人助けしたいって人だもの。数年でもいい、あたしたちも雇ってあげようじゃないか。それにこの人はきっと何でもできるよ。」
それから数年、はるかは夫婦が見込んだとおりに何でも器用にこなした。接客、材料や商品の運搬、掃除、テキパキと動くその姿は店に清々しい風を吹かせ続けた。
あの日、警察学校のことを女将に話すと、そりゃぜひお引き受けしなさいよ、あんたを失うのは嫌だけど、うちはまたなんとかするから。と言ってくれた。
「さっきからみんな、あんたが暴れ馬を静めたって話で持ちきりだよ。和菓子屋に置いとくにゃ惜しいってさ。あぁ、あんたが制服着た姿を想像すると、なんだかわくわくするねぇ。卒業したら、一度は凛とした制服姿を見せに来ておくれよ。」
「はい、ぜひ。」
女将はしばらく彼女を抱きしめていたが、やがて名残惜しそうに手を離した。

「それでは、ソフィア警視とお呼びいたします。講師のお話、お引き受けします。和菓子屋は快く承諾してくれましたゆえ。」
「ありがとう。よろしくお願いします。そうそう、楓さん・・・今は春野亜矢さんというのだけれど、貴女のことを話したら、なんと幼なじみだというじゃないの。もちろん今すぐにでも会いたいわよね。」
「はい。」
「それでは行きましょう。」

二人は女子寮のある部屋の前まで来た。
「それじゃ、私はここまで。あなたのお部屋は右の五号室にしましょう。夕食は六時半、あとは亜矢さんから聞いて。」
「どうもありがとうございます。」

はるかはドアをノックした。はい、という声が聞こえた。聞き覚えのある、懐かしい声に違いなかった。
扉が開いて、ショートカットの女性が立っていた。
「楓・・・か・・・？」
「桔梗？桔梗だよね？」
二人はしばらく立ちすくんだ後、どちらからともなく抱き合った。生きて会えるなんて・・・二人ともそう思っていることは互いにわかる。

「私はあれからあちこちで働いて、お金を貯めて薬科大に入ろうとしていたんだ。それが先祖代々の罪滅ぼしだと思ってね。でも、ソフィア警視と出会って、ここに来た。」
「そうだったのか。私は人探しをするために戸籍係になった。役所で事情を説明したら、それが紫政帝陛下のお耳に入ったとかで戸籍係に採用して下さったんだ。」
「人探し？誰を探しているんだ？」
「隼を覚えているか？」
「隼・・・。覚えているぞ。そうか、そうだったのか。しかし何故離れ離れになったのだ。」
「解散令が出ることはあの日まで長老たちにしか知らされていなかった。隼は、そのときたまたまどこかに諜報活動に行っていたのだ。己が使命は親兄弟にも漏らすなかれ・・・ましてや許嫁にもな。
　村長（むらおさ）は、彼も呼び返そうとしてくれたらしいのだが、その時にはすでに連絡が取れなくなっていた。」
「・・・そうだったのか・・・。」
　自分は人を恋したことはないが、この友の心中を推し量ることはできる。
「そして、数ヶ月前、陛下からこう言われた。こんなに長い時間をかけても手がかりが掴めないということは、もしかしたらほかの大陸にいるのかもしれぬ。もはやこちらから探しに出向くしかあるまい。今度、従来の型を逸脱するような警察学校のカリキュラムを創る。警察官の殉職を減らすためだ。そこで警察官になって、海洋警察官として探して回る気はないか。もちろんそのあいだも戸籍係には言い置いておくが、と。」
「なるほど、海洋警察なら世界を回れるな。」
「それにしても、ここでおぬしに会えるとは思わなかったぞ。しかも、ファイーナ様がソフィア警視と名乗っておられるのだからな。驚くことが多い。」
「姫様は、短期間で後継者を育てるとおっしゃった。紫政帝陛下にしても、殉職する警察官を減らしたいというご意向がある。一石二鳥ということだ。それに加えて、おぬしの幸せか。ここには一体いくつの希望や目的が込められているのだろうな。」

一三. 天才科学者と弟子

　「いやー、まだ暑いですな。」
　そう言いながら杖をついて食堂に入ってきたのは、周公沢である。紫政帝が紹介してくれた講師の一人だ。ただ、彼だけは実験時の事故の後遺症で足が少し不自由なため、訓練生という立場をとらず、科学を教えるのみということになっている。そして傍らには弟子の呉章英が付き添っている。公沢の身の回りの世話をしつつ、科学者の道を歩んでいる青年である。

「こんにちは、博士、呉君。」
　篤史は彼を『博士』と呼ぶことにした。公沢も、そのほうがよいだろうと同意している。
「何せ、もう年ですわ。今さら猛訓練なんかできしまへん。」
「しかし、警察学校へは協力してくださる。」
　篤史は冗談めかして言った。
「そら大恩ある皇帝はんのご依頼とあらば断れまへんやんか。それに、たまには外の空気を吸うのも悪くはおへんから。」

彼は弟子のほうをチラリと見て言った。

篤史も公沢の意を察した。
「ときに、呉君は・・・やっぱり夢は科学省かね。まぁ、博士のこともあるからそのままでも構わないが。」
「はい、申し訳ありません。僕は科学者になりたいんです。」
「うん。無理強いはしないよ。ただ、科学だけじゃなくて、他の世界も見ておいたほうが、科学の世界の深層までいけるかもしれない、ということだ。君は、ただ我々を観察していればいい。」
青年は頷いた。

二人がこの国に帰化したのは八年前のことだ。
基幹産業である農業の生産効率を上げるため、紫政帝はトラクターのための高機能モーターの開発を指示した。そのために招かれたのが公沢だったが、そのあいだに政治家だった叔父が失脚。比較的裕福だった彼の一族は一転して離散した。公沢も故国に帰れば何が起こるかわからない身の上になってしまったのである。
紫政帝は、彼らの身を案じて帰化を勧めた。
「ここに籍を置けば、誰も君たちを狙う必要がなくなるが、どうだろうか。それに、どのみち、ものの開発には終わりがない。ここにずっと留まることになるのだろうからな。」
「そうですなぁ・・・。ここに来るときも、ある程度の覚悟はしてきたはずやのに・・・。なんや愛おしい言うんか、未練みたいなものがありましてなぁ。でも、この子ももしかしたら巻き込まれるかわからんし・・・。仕方あらへん。お世話になりまひょか。よろしゅうお願い致します。」
「僕のことはええんです、博士。」章英が言った。
幼いときに両親と死に別れた彼は、親戚の家や施設を転々としながら成長した。人間というものにほとほと嫌気がさし、無機質で純粋な科学の世界にのめり込んでいった。
公沢は、科学の純粋さに惹かれるという彼に、若い頃の自分を重ね見て、正式なアシスタントとして連れて歩くようになった。章英も公沢のずば抜けた科学的才能と大らかな人柄ゆえに、次第に打ち解けていった。今では心から信頼し、尊敬しきっている。（どこまでもこの博士について行きたい・・・）そう思っていた。
「おまはん、わしが死んだらどうするんや。」公沢も一度そう言ったことがある。
「わしにずーっとついてきてくれとるんは、ほんま嬉しい。だけどなぁ、歳から言うてわしのほうが先に逝くでぇ。おまはんはおまはんや。ちゃんと自分の進むとこ、みつけなあかん。」

どこからか、竹同士が激しくぶつかる音が聞こえてきた。
「なんや、すごい音しよるな。行ってみまひょか。」
公沢に続いて章英と篤史が音のするほうへ行ってみると、武道場で二人の女性が竹刀でやり合っていた。
「腕はなまってないな、桔梗。」
「あぁ、おぬしもな。嬉しいぞ。」

あとから入ってきた三人は、立ち会いの激しさ速さ、気合にたちまち圧倒された。人が入ってきたの

で、二人は竹刀を納めて向かい合って一礼し、近づいてきた。
「春野君だったか。すごい音がしてたぞ。」篤史が声をかけた。
「あ、加賀警視正。それに博士と章英さんまで・・・。響いておりましたか。申し訳ございません。こちら、同じく忍びの者で、今井はるかと申します。久しぶりゆえ、手合わせをしておりました。」
　亜矢がはるかを紹介した。
「ききょ・・・ではなかった、はるか、こちら、校長の加賀篤史警視正。と、科学者の周公沢博士とアシスタントの呉章英さん。」
「初めまして。今井はるかです。どうかよろしくお願いいたします。」
「君が今井君か。ソフィア警視から話は聞いてるよ。来てくれるのかな。」
「はい。お引き受けする旨、先程ソフィア警視にお伝えしたところです。」
「それはよかった。君のことも楽しみにしてるよ。よろしく頼む。」
「はい。」

（女の人やのに、あんなにすごい戦い方するんか。）
　章英は呆然と立ち尽くしていた。いや、武道の立ち会いそのものを見るのも初めてだった。彼が育った国では、スポーツはあまり盛んではなかったし、彼自身も学校の部活動になど全く興味がなかったからだ。
　たしかに違う世界、彼の知らない世界がそこにはあった。

一四. 入学式

　惑星ルシアでは、一年は一二ヶ月、ひと月は四八日と決められている。これはルシアの公転と、アルム、イスカという二つの衛星がルシアの軌道上で交わる周期とによる。
　太陽暦六四年十月七日の朝十時、アイユーブ警察学校の校門が開いた。なお、入り口には立て看板があり、こう書かれていた。
　　「太陽暦六四年度　アイユーブ警察学校　入学式
　　最高レベルの警察官訓練生求む　脱落も覚悟の上で校門をくぐられたし」

　チャイムが鳴った。中から一人の男性が現れて、ややゆっくりしたテンポでこう言った。
「お集まりの方々、ようこそアイユーブ警察学校へ。私は校長を務める加賀篤史と申します。看板はもうご覧になったかと思います、それでなくとも警察官の訓練は厳しいことで知られていますが、これからここで行われる訓練は、有能な講師たち自身も自分の専門科目以外は訓練生となり、切磋琢磨して、より高度な知識や技能を作り上げようとする新たな試みを目指します。よって、入学一年で巡査の資格を取れていなければ退学とさせていただく。それくらいの覚悟を諸君に求めます。・・・」
　会場にどよめきが起こった。どれほど高度で過酷な訓練になるのだろうか・・・。
「しかし、それを見事に成し遂げたとき、そこには最強の警察官たちがいてくれると、私たちは信じています。その日を目指してください。以上です。」

　集まっていた人々のおおよそはその話の内容に驚いて去ったが、二〇人ほどの人々が門をくぐった。
　ジェシカ・ティスードと神崎リュウは、普通の警察学校に入るつもりでここに来たが、別段おじけづ

くこともなく校内に入っていったこの二〇人に含まれていた。
「どんなに厳しくても、私は父さんの後を継ぐんだ」
　ジェシカはそんな思いでいた。
「警察官は厳しくて当たり前なんだ。そうでなければ人の命を守れやしない。」
　リュウはこの仕事に就くことを決めたときから覚悟していた。

　そんな二人が隣り合わせになって着席したのは、本当の偶然だ。
「失礼ですけれど、あなたの髪の色、とても綺麗ですね。」
　話しかけたのは、ジェシカからだった。
「え、あ、はい。ありがとうございます。僕はオルニアとライランカのハーフなんです。小さいときはこの緑色のせいでよくいじめられて本当に嫌でした。褒めてくれたのは両親や学校の先生達くらいなものですよ。」
「あら。こんなに綺麗なのにね。・・・　私はジェシカ・ティスードといいます。父も警察官でした。」
「神崎リュウです。そうですか。実は僕も両親とも警察官で。」
「なんだか気が合いそうですね。よろしくお願いします。」
「こちらこそ。」

　程なくして、先ほどの男性が壇上に上がった。ゆっくりと全員を見渡してから、話し始める。
「先ほどは野外にて失礼しました。校長の加賀篤史です。こうしてこの学校の門をくぐられてきたからには、皆それぞれに警察官になりたいという強い思いや覚悟がおありの方々ばかりなのでありましょう。一人でも多くの方が立派な警察官となられるよう、講師一同、心を込めてご指導いたす所存であります。何か悩み事や辛いことがあった場合は、誰でもいい、遠慮なく話してください。訓練は厳しくとも　私を始めこの学校にいる人たちはみんなが志を同じくして集った同志、仲間、家族です。決して一人ではない、それだけは忘れないでください。」

　ジェシカはその時、篤史の瞳に温もりを感じていた。他の幾人かも同じだった。
　だが、次に進み出てきた人物を見て、少し驚いた。
「あら、あの方は・・・。」
　リュウも思わず呟いた。
「あれは・・・ライランカの・・・。」
　リュウの髪とは違う、紺碧の海の色をした髪。純粋のライランカ人のようだった。
「皆さん、初めまして。副校長のソフィア・テジェスです。これから皆さんを男子寮と女子寮それぞれにご案内いたします。今日は荷物を置いて、夕食までゆっくりしておいてください。明日からは規律正しい生活になりますから。」

　各々が部屋に入るとき、ソフィアは生活の規則を書いたプリントを手渡しした。起床時間や訓練内容やスケジュール、週末は自由時間があり、アイユーブ市内であれば外出も許可されることなどだ。

　やがて、リュウの番が来た。
「はい、あなたも。・・・あら？その髪は？」

「僕は、母がライランカ人なんです。母はタカユヤ州の出身ですが、今はオルニアで警察官をしています。」
「あぁ、そうなんですね。わかりました。よろしくお願いします。期待していますよ。」
「どうかよろしくお願いいたします。」

　そのあとから、見覚えのある顔が見えた。
「あら、あなたは。来て下さったのね。」
「はい、とても厳しいみたいで、果たして僕がなれるかどうか分かりませんけど。」
　それは、広場で似顔絵描きをしていた藤原景時だった。
「大丈夫。あなたならきっとなれるわ。」
「ありがとうございます。頑張ります。」

　最後にジェシカが女子寮の部屋に案内されたときには、ソフィアは少し疲れた様子だった。無理もない、二十人ほどの人々を相手に、ひとりひとり話しかけながらプリントを渡してきたのだ。
「失礼ですけれど、お疲れなのでは・・・。」
「ありがとうございます。正直疲れました。でも、生徒さんを少しでも知っておきたくて。それも務めですから。」
「ご自分にお厳しいのですね。私の父も警察官でしたから、警察学校の内容は聞いていました。でも、ここはきっともっと厳しいのでしょう。あなたのもとで行われる訓練、楽しみになりました。」
「お父様は今？」
「亡くなりました。癌でした。」
「そう・・・。聞いてはいけないことを聞いてしまいましたね。ごめんなさい。」
「いいえ、いずれはお耳に入ることですから。どうかお気になさらないでください。そして・・・どうかお休みください。あとは自分でやります。」
「ありがとう。それじゃ、お休みなさい。」

　彼女の観察眼はなかなかかもしれない、とソフィアは思った。常にすべてのものを観察する力、それは人として大切なことのひとつなのだ。

一五. 環境設計学

　講義は、篤史による「環境設計学」で始まった。
「諸君は、何故警察学校で環境設計学を学ぶのか、不思議に思っているでしょう。でも、それには理由があるのです。」
　篤史は、こう切り出した。以下、彼の講義内容である。

　警察官は普段、治安維持や市民の安全確保の為に活動する。
　そのとき、自分が活動している土地の特徴、すなわち地の利を熟知していたほうが仕事は格段にやりやすくなる。また、大規模災害の際には、人々を安全な場所まで誘導することも任務となる。例えば、地震が起こったとき、津波を想定して、できるだけ高台へと人々を誘導すること、これを瞬時に判断し

なければならない。それが、環境設計学を学ぶことの意義である。
　また、他の業務においても、その意義は同じで、必要不可欠なものだから、一人でも多くの人に知っておいていただきたい。

　この世に「絶対」はない。
　形あるものも、目に見えないものも、時を経ればいつかその形を変える。
　絶対に安全と謳って作られた防波堤であろうとも、やがては朽ち果て、建て直すか波に壊されるかのどちらかになる運命だ。

　決して「自然」を甘く見てはいけない。どんな大きな船もひっくり返し、山崩れは村や町をいとも簡単に呑み込む。そのとき、我々は為す術もなく自然の営みの大きさを目の当たりにするのである。

　しかし、そうした中で人は団結し、助け合い、知恵を駆使して、共に生きていく。「人」とは、それができる生き物なのである。たとえ家族や友人、親しい人々と別れてしまったとしても、「思い出」として胸にとどめておくこともできる。それが人間の素晴らしさではないだろうか。

　実例で、こんな話がある。
　海辺にほど近いところに、小さな村があった。
　山の中ほどに 「これより下に人住むべからず」という碑が建っており、人々は理由を分からないまま、その通りにして、その碑から下には田畑しか作らなかった。
　 あるとき、大きな地震が村の一帯を襲った。周辺の村々は津波に呑まれて、多くの犠牲者が出たが、石碑の村の人々は全員が生き残った、とのことだ。
　石碑を建てたのは、村の遠い祖先だったと思われるが、このようなことが環境設計学を学ぶということである。

　自然と共存しながら、または地の利を活かしながら、人々と親しく共に生きていく・・・それを「幸せ」と呼ぶのではないだろうか。
　しかるに、そのような、愛すべき人々を守ることこそが、我々警察官の使命である。

一六. 剣の道

　一二時になると、地元出身者はシャイナニ教の礼拝室で祈りを捧げ、その後にほかの訓練生たちと食事をとった。午後からは体育系の訓練を受けるため、やや軽めにしておくようにとは指定されていたが。

　現在の惑星ルシアでは剣士の資格が統一され、一級から五級までおのおの白・紫・青・赤・緑とサーベルの柄の色が決められている。オルニアだけは独自に発展した一枚刃による剣道があったが、それもサーベルと同等の等級が割り振られた。セルジオ・カルルは白い柄のサーベルを腰に差し、滝田光昭もオルニア剣道ながら白い柄の刀を帯びている。
　光昭はオルニア警察きっての剣豪の一人である。彼はまず訓練生全員に念入りなストレッチと一里の走り込みを課した。

「中には走り慣れている者もいると思うが、オルニア剣道の基本は足腰なので、走り込みは毎日欠かさずおこなってもらいます。たかだか一里と侮るなかれ。雨の日も風の日も走ります。宜しいですな。では、私についてきてください。」
　光昭の後を、セルジオ・カルルが、今井はるかと春野亜矢が続いた。ジェシカ・ティスードと神崎リュウ、ほかの訓練生たちも警察官になる日のためにある程度の体力は蓄えてきたとみえ、遅れずについて行く。
　ある意味では、藤原景時だけが走り込みに慣れていない例外といえよう。コース半ばから息をぜいぜい言わせている。
「どうやら君は教え甲斐がありそうだね。」
　光昭が声をかける。
「申し訳ありません。僕はずっと絵ばかり描いてきたもので。」
「ほう、そういえば今回の訓練生のなかには美大卒がいるとのことだったが、君がそうか。なに、心配することはないよ。僕たちが一人前に育ててあげるから。」
　そう言って彼の肩を軽くたたいた。

　彼は一からのスタートだからまだよい・・・光昭は元くノ一の二人のことを気にかけていた。彼女たちが幼い頃から身につけてきたのは殺戮の剣。それを警察官の剣術に矯正しなければならない。
　いや矯正というのは違うな・・・。彼女たちに一旦完全な警官の剣道を覚えてもらってから、今度は僕自身が忍びの技を習得して、新しい技、新しい身のこなし方を作り出すことになる。いわば全ての者たちが何らかの変化をしていくのだ。
　ルシャナの「星法の書」にもこうある・・・

> 教える者、施す者は、実は自らもまた教えられ、施される者でもある。全ての者が互いに他の全てから影響を受けて変わっていく。人はそれぞれの瞬間に出会い、やがて散っていくもの。そのあとにはその人と出会ったという記憶と、ふれあったことによる影響、変化が残るのだ。

　・・・と。

　それから模範演技として、光昭とサーベルの剣士・セルジオの竹刀による他流試合が行われた。流派は違えど、剣の道は同じである。剣豪同士の立ち会いのスピードと正確さ、安定感が見る者を圧倒する。
「では、これから基本の打ち込みの練習をしばらくは続けてもらいます。その後に二人一組になっての練習に切り替えるから油断なきよう。特に腰の動きを見ていきます。」
　各自が見よう見まねで竹刀を上から下へ打ち下ろしている中を光昭が回り、「これはここをこうして。」という具合に指導していった。
　元くノ一の二人、はるかと亜矢は模範的な素振りをしている。どうやら僕の考えは間違っていたようだ、と彼は思った。忍びたちは剣道の基本を身に付けていて、それに忍び独自の技を臨機応変に繰り出すからこそ、名だたる剣士たちが忍びに勝てなかったのではないだろうか・・・。
「それでは本日はここまで。みんなほぼ動きはいい。始めにしてはよくできたと褒めておきますが、実戦にはまだまだほど遠い。精進して下さい。」
　彼がこう言って講義を終わらせたときには、ほとんどの者が汗をかき、息を切らせていた。

やがて武道場から人がいなくなった頃、セルジオ警部が近づいてきた。
「やはりみんな他流試合は初めて見たようですね。たとえ見たことがあったとしても、白い柄の剣士は限られている。私にとっても貴方ほどの強敵は初めて。よい機会をいただいた。」
「こちらこそ。サーベルの講義の時はどうぞお手柔らかに。・・・ところで、加賀警視正とソフィア警視のお姿がなかったようですが？」
「加賀警視正は校長として事務方のお仕事もおありでしょう。そして、これは貴方が異動してくる少し前に講師一同が加賀警視正から伺ったことですが、ソフィア警視にはドクターストップがかかっているそうなのです。だから体育系の訓練はできない。どうやらどこかご病気のようですね。」
「そうだったのですか。」
「警視ご自身は、訓練にも参加されたいようなことはおっしゃっていましたよ。悔しいけれど、現実にはもう勝てないと。」

一七. 使命

一ヵ月後、午前の講義は環境設計学から法律学へと切り替わった。講義期間は三カ月。憲法から始まって国際法、刑法と、徐々に細かな項目になっていく。
「為政者が守るべき法が憲法です。みなさんも知っているように、平和を維持し、どの国の市民に生まれても平等に安全に幸せに暮らせるように取り計らうために皇帝が置かれているのですが、その皇帝が万が一にも憲法を変えて国を私物化するようなことがあれば、市民はそれを阻止しなければなりません。それは市民の権利であり、義務でもあります。」
そう語るソフィアが自ら異国の地に後継者を求めて来たのも、実はこのためだった。
自国の国民は全員が彼女のことを知っている。みんなが表の顔しか見せていない可能性だってある。であれば、顔が知られていない異国から後継を探したほうが良いのではないかというのが、彼女と父・アルティオ帝が導き出した結論だったのだ。

宮廷医務官の一人で内科医のナディア・サディラは、皇女の体調を案じて渡航に反対したが、その決意を知るとオルニアの医師に紹介状を書いてくれた。
「もうお引き止めすることは叶いますまいが、どうかくれぐれもお身体にさわるようなことはなさいませぬよう。当地の山形かなみ医師は私が知る中でもトップクラスの医師です。必ずお訪ね下さい。」
「わかりました。ご心配かけてごめんなさい。必ず山形医師にお会いします。」

山形医師が勤める朝川総合病院は、宮殿のある首都・湯井岡市の隣、朝川市の中心部にある。
オルニアに着いて一週間後、水曜日午後の総合病院にソフィアの姿があった。
「こんにちは。初めてお目にかかります。担当の山形です。サディラ医師からお話は承っております。ソフィア様、でしたね。」
かなみは軽く会釈しながら言った。歳を重ねて幾分かふくよかになりかけている、そんな印象だった。
「はい、どうかよろしくお願いします。」

グナンリラ病は、十万人に一人という稀な発生率で現れる病気である。
症例が極めて少なく、治療法もまだわかっていないが、発症すると心臓の動きが徐々に遅くなり、や

がて停止してしまう不治の病とされている。
「幸い、現在はさほど心配のない段階のようです。サディラ医師と同じ処方をしておきますが、二週間に一度は、必ず来て下さい。」
　かなみにとっても、この病と向き合うのは初めてのことであった。患者が誰かということよりも、この稀な症例を如何に悪化させずに持たせるか、そのことに真剣になるべきだと彼女は考えていた。
　少しでも多くの患者と、多くの症例と向き合って、研究を進め、さらに多くの患者を助ける。それこそが医師の務めだ。

　それ以来、ソフィアは隔週水曜日の午後、欠かさず通院している。副校長としての仕事は他の時間内に全て終わらせ、体育系の訓練の時間内には帰る、そんな形だった。
（もし健康体のままだったら、みんなと一緒に汗をかけるのになぁ・・・。）
　幾度そう思ったことか。だが同時に思うことがある。病にならないでいたら、自分は国を出ることもなく、今は共に暮らしている人々と出会うこともなかったであろう。もしかしたら将来生きる人々ために、自分はそういう経験をするように位置付けられたのかもしれない・・・。

一八. 似顔絵

　警察学校はひと冬を越した。訓練生たちも毎日の走り込みや受講でだいぶたくましく精悍な顔つきに変わってきたように思える。
　ソフィアの法学講義は厳しく、毎週末の復習テストで成績が悪かった者は、日曜日に補習を受けた。そういった努力が実り、法学の講義が終わる頃には、法学の知識での脱落者は一人もいなくなっていた。

「ソフィア、お疲れ様。」
　法学の最後の講義が終わった日の夕方、篤史が言った。
「みんな良い顔になった。精悍な雰囲気が滲み出てきたように見えるよ。」
「そうですね。私の法学は終わりました。あとは、他の講師の方にお任せします。それに、みんなの警察官としての自覚がどこまで芽生えるかというところもありますね。」
「確かに。」
　彼はふと息をついた。彼は男子寮を、彼女は女子寮を抜き打ちで見回っている。大方の講習生たちはきちんと整理整頓が出来ているのだが、卒業までは決して気を抜けない。この間も、景時が画材を洗い場に出しっ放していたのを注意したばかりだ。
「画材を持ち込んでいても構わないが、出しっ放しはいけないな。君がいないあいだに、誰かが怪我をして傷口を洗い流しに来たらどうするんだ。邪魔になるだろ。洗い場だけではない。すべてのものがあるべき場所にあるべき姿でなければ、誰かが困るのだ。
　そして、完璧に近い形でそこにあることこそが美しいということなのではないだろうか。君は恐らくずっとキャンバス上で美を追い求めてきたものと思う。これからは、世界全体をあるべき姿、美しい姿に保っていくんだ。それが我々警察官の仕事なんだよ。」
「申し訳ありません。考えが到りませんでした。」
「以後、気をつけるように。」
「は。」

注意し終わってから、篤史は思った。
（あれ？僕は父上と同じことを言った。・・・）

「そういえば、君は絵描きだったね。ひとつ頼まれてくれないか？」
「はい。何でしょう？」
「実は、春野君には生き別れになっている許嫁がいてね。その人の似顔絵が欲しいんだ。」
「分かりました。やってみましょう。まずは亜矢さんから特徴を訊かないと。」
「ありがとう。それじゃ、土曜日の午後に第二会議室に来てくれ。」

土曜日・・・景時が指定の部屋に入ると、そこにはすでに篤史とソフィアが待っていた。
「どうもありがとう。お話は加賀警視正から伺ったわ。亜矢さんも、すぐに来るはずだから。」
ソフィアが言った。
「それにしても驚いたよ。これが君が描いた絵なんだって？まさしくソフィア警視にそっくりだ。よく出来ている。」
篤史が見ているのは、景時がソフィアと出会った時に描いた似顔絵である。
「あのときの絵ですね！まだ持っていて下さったんですか？」
「当たり前じゃない。記念だと言ったでしょ。」
ソフィアは微笑んだ。その時、亜矢が入って来た。
「お待たせしまして。」
「まだ約束の時間ではないが、君が最後とは珍しいね。何かあったのかな？」
篤史が尋ねた。
「いえ。ただアウロラが愚図っただけです。」
アウロラというのは、警察学校で飼育している犬の名である。訓練生たちが毎日交代で散歩させているのだ。
「そうか。それじゃ始めてもらおうか。藤原君、あとは頼んだよ。」
篤史とソフィアは、そのまま部屋を出た。

「それでは亜矢さん、顔の輪郭から伺いますよ。だいたい幾つくらいの方ですか？髪型は？」
景時が訊く、亜矢が答える・・・その繰り返しが二時間くらい続いた。
「ありがとう、画伯。とてもよく似ているわ。・・・とっても・・・。」
気丈なはずの亜矢が涙ぐんでいる。
「愛しておられるのですね・・・。この方を・・・。」
景時は察した。
「えぇ、とっても！」
亜矢は、はっきりと言った。
「僕もお手伝いします！同じ絵を何枚でも描きます！みんなに配りましょう！」
「ありがとう・・・。」
亜矢は、景時の手を両手で握った。
訓練生だけではなく、事務員や地元商店街の掲示板まで、五十枚もの似顔絵が描きあがるまでには半月を要したが、景時はやり抜いた。毎朝早く起きて、だいたい五枚ずつ描いたのだ。

　勿論亜矢からは、何度もお礼を言われた。
「よくやってくれたね。」
　篤史からもソフィアからも褒められた。
「いえ。幾つ描いても、結果が出なければ。みんながそれぞれの赴任地で貼り出してくれるとか。」
　景時は言った。だが、篤史や光昭は彼を見直した。自分以外の誰かのために、寝る間も惜しんで半月も同じ絵を描き続けた、心優しく強い男がここにいたのだ。

一九. 暁の食堂

「実は、今度の日曜日、紫政帝陛下から昼食会に参加していただきたいとのことなのだが。」
　周りに誰もいないことを確かめて彼は言った。
　ソフィアは少し考えてからご招待をお受けしますと返事をした。そういえば紫政帝陛下とはしばらくお会いしていない。陛下も警察学校の様子や、あるいは自分の病状のことを心配して下さっているのかもしれない。

　日曜日、篤史とソフィアは学校から少し離れたところで落ち合って宮殿へ向かった。
　紫政帝は明るいテラス席で二人を出迎えてくれた。
「や、今日は新郎新婦お揃いでお出ましかな。」
　老帝はニヤッと笑った。実際、自分より若い男女二人が、お揃いの警察官姿で登場してくる様は、彼にとって初々しい以外の何者でもなかった。
「陛下、そんなお戯れを。恐れ多いことにございます。」
　篤史はたじろぎ、ソフィアは顔を赤らめた。
「そうかな。君たち二人はどこからどう見ても・・・。まあよい。さて、それではゆるりと警察学校の近況を聞かせてもらおうかな。皆は慣れたかね。」
「はい、訓練は順調に進んでおります。訓練生たちもだいぶ変わってきました。今は、法学と剣道の講義が終了し、科学と合気道の稽古に切り替えるところです。このままでいけば、次の資格試験には、ほぼ全員が巡査に合格するかと。」
　篤史が報告する。
「そうか、順調に進んでいるのじゃな。何よりだ。それと、ソフィア、大事ないか。医師の診察は受けているそうだが。」
　やはりこの方は案じて下さっていたのか、とソフィアは思った。
「どうもありがとうございます。おかげさまで無事に日々を過ごしております。紫政帝陛下には過分なるご配慮をいただき、感謝申し上げます。」
　それから三人は今後の講義の予定や定期的な打ち合わせの日取りなど様々ことを話し合った。
　その間、篤史はちらちらとソフィアの顔を見た。紫政帝から言われるまでもなく、彼はその少し前からソフィアのことが気にかかるようになっていたのだ。
（だけど、この人は隣国のお姫様・・・そんなわけにはいかないじゃないか。）
　そう思っていた。
　だが、いざ他の人から言われると、恋愛への憧れが脳裏をかすめる。
（彼女は美しく聡明だ。僕も妻にするなら、こんな人がいい・・・。）

その翌朝。
朝のジョギングに出かけようとして食堂の脇を通りかかると、ソフィアが一人で座っていた。折から強く部屋の中に差し込み始めた朝日が彼女の顔を照らす。一瞬、涙が見えた。
篤史は思わず声をかけた。
「ソフィア？」
「あ、加賀警視正。」
彼女は慌てて涙を拭おうとして下を向いた。と、不意に暖かいものに体が覆われた。篤史が彼女を抱き寄せたのだ、
「僕の胸ならいつでも貸す。泣きたい時は泣いていいんだ。」
「え、でも・・・。」
彼女がそう言いかけたとき、篤史は彼女の腰を抱えながら、もう片方の手でその頬に触れて唇を吸ってしまっていた。
（僕は一体何をしているのだ。だけど・・・もうこの人が誰かなんて関係ない・・・。）
彼はソフィアの体をより深く包み込みながら言った。
「ソフィア、ここでは君も私も一警察官でしかない。お互い恋に落ちても構わないだろう。・・・」
ソフィアは、驚いて相手の顔を見た。男の顔をこんなに間近に見るのは、父親以外初めてだった。それも、明らかに父親とは違う表情だ。優しく、しかしこちらに何かを求めて止まぬ情熱を秘めた顔が、自分を見つめている。
彼女は吸い込まれるように男の胸に包まって泣いた。・・・

二人の抱擁はほんの二十分ほどだったが、その間にその光景を見てしまった人物が二人いる。
「あ・・・。」
その日も似顔絵を描くために早起きして 廊下を通りかかった景時は息を呑んだ。誰かに不意に肘を掴まれ、廊下の端まで引っ張っていかれる。
「恋の道行きをそんなに見ているなんて野暮なことするもんじゃないわよ、画伯。」
今井はるかが立っていた。
「あ。やだなぁ。通りがかっただけですよ。ただ唖然としていただけですし。」
「ま、私もそうなんだけど。」
「でも、あのお二人が・・・。あの、その、・・・。」
「無理もないわ。私だって驚いてるもの。でも、お似合いなことは確かね。貴方も薄々感じてたでしょう？」
確かにそうだ。校長と副校長、警視正と警視、二人が一緒にいる時間もかなりあって当然だ。こうなるのはごく自然かもしれない。

むしろ景時以上に驚いていたのは、はるかのほうだ。声は聞こえなかったが、読唇術で読んだ篤史の言葉は、こう言っていた。（ここでは君も私も一警察官でしかない）・・・。ソフィアが姫様なのは知っている。しかし、この言葉はまるで加賀警視正もただの警視正ではないかのようではないか。そういえば、彼が教えたのは「環境設計学」。それもかなり高度な思考と知識を兼ね備えたものと見る。しかも、亜矢から聞いたところでは、彼は忍びの者から剣術を教わったのだという。

・・・彼は一体何者なのか。

翌朝、篤史が日課のジョギングから帰ってくると、もう少しで校門に入るというところに、ソフィアが立っていた。
「おはよう。」
篤史が声をかけると、彼女は意を決したように言った。
「おはようございます、加賀警視正。昨日のことでお話があります。」
二人は校舎からは見えないはずの舗道に移動した。
「昨日は失礼いたしました。貴方の暖かさについ甘えてしまいました。でも、貴方を巻き込むわけにはいきません。もう甘えないつもりです。」
「ソフィア・・・。」
やはりその話だったのか、篤史はソフィアを見つめた。彼女は彼の視線を晒そうと懸命なようだった。
「ソフィア、僕が一時の感情で君を抱きしめたと思う？少し前から君に惹かれていたんだ。好きな女性の涙を見て、抱きしめないような男がいたら、そいつはとんだ大まぬけ野郎だ。」
「好きな女性・・・。」
ソフィアはまさかという表情で彼を見た。
「そう、僕は君を好きになってしまった。もう男としてしか君を見られない。だから、君が誰かなんて関係ないと昨日あのとき誓った。」
「そんな・・・。」
彼女は悟った。彼は心から自分を愛してくれているのだ。
声が震える。ささやかな願いかもしれない。わずかなあいだでも恋がしたい、この人となら・・・。その温かい胸に抱かれていたい・・・。
「・・・それではせめて約束してください。貴方との恋は、ここにいるあいだだけにしておくと。」
「わかった。」
篤史は答えた。しっかり彼女を見つめ、きつく抱きしめながらキスした。互いの鼓動が聞こえた。

それからは、二人は数日おきに学校から少し離れた公園のベンチで落ち合って、抱き合ったり、一緒に食事に行ったりした。
「僕のことは『篤史』と呼んでくれ。」
（もう恋人同士なんだから・・・。）篤史はその言葉を呑み込んだ。『恋人』という言葉を使ったら、きっと彼女は自分を巻き込むことを恐れて、プライベートでは会ってくれなくなるだろう。
ソフィアも、この人といられるのは、卒業式までのことで、帰国後は、この温かい胸は思い出として秘めておこうと思っていた。否が応でも後戻りしなければならないその日まで・・・。

二〇. 生命の時計

九月、資格試験を一週間後に控えた土曜日の昼である。神崎リュウが日替わり定食のプレートを持ってソフィアのそばに来た。
「ソフィア警視、お向かいの席で食べていいですか？」
「えぇ。もちろん。」

ソフィアは、少なめのパンセットを食べ終えて。コーヒーを飲んでいた。
「実は、以前から警視に是非とも伺いたかったことがありまして。」
「あら、何かしら？」
「ライランカの髪は遺伝なんですか？僕はずっとこのままなんでしょうか？」
「んー、貴方がどうしてそんなことを訊くのかはわからないけど、結論を言うと、そうなるでしょうね。ライランカ人は、国を離れても百年くらい髪の色が変わらない。貴方の髪にライランカの色が残ったままになっているのは、遺伝とも言えるし、そうでないとも言えるの。」
「やはり、そうですか。小さい頃から、ずっと調べてたんです。でも、遺伝という説と、後天的な理由だという説と、両方あって。母に訊いても教えてくれません。周りにライランカ人は他にいなかったものですから。」
「そうだったのね。」
「もうすぐ資格試験です。もし落ちたら、もう貴方には訊けなくなると思って。」
入学式の日、篤史が一年後の資格試験で巡査の資格を取れなければ退学扱いにすると宣言したことを思い出す。あれは、各自の覚悟を試す事前審査だったのではないかと、訓練生たちはしばらくしてから察するようになっていたのだが。
「なるほどね。でも、試験に落ちるなんて事はないわ。貴方、ずっと警察官を目指して頑張ってきたんでしょう？それに何より、私たちが指導したんだもの。合格するわよ。ただ油断しなければの話、それだけよ。」
「わかりました。どうもありがとうございます。やっと胸の支えが取れました。だけど、なぜ母は教えてくれなかったのでしょう・・・。僕がこんなに悩んでたのに。」
「それはね、この色の原因が科学的にまだわかっていないからなんです。私たちは、守護精霊テティスのご加護と呼んでいるけれど、もし科学的にわからない何らかの成分のせいだとすると、他国の人から忌み嫌われ、恐れられるかもしれません。そういうわけで、貴方のお母様もできるだけ口外しないようにしていたのでしょう。」
「守護精霊テティス・・・その名前は母からも聞いています。」
「ただね・・・。これだけはわかってほしいの。どの人も、国籍や人種、性別、世代なんか選べないまま生まれてくるってこと。全てが偶然なのよ。偶然に起きたことに、悩んだり悲しんだりしても仕方がないわ。貴方もそう思うでしょう？」
（そう。私も運命に悩んで悲しんでる・・・。）

警察官の資格試験は、オルニア警察本庁・体育館で実施された。筆記試験と容疑者確保技能の実技がある。
アイユーブ警察学校の訓練生たちは、みな見事な成績で巡査資格を突破していった。
「さすがに貴女と加賀警視正がご指導されただけのことはあるわね。」
好子が言った。ソフィアが警視になった時の面接官の一人である。あの日以来、彼女はソフィアと手紙のやり取りをしてきた。機会があれば会っていろいろな話もした。今ではすっかり親友と呼べる間柄だ。
「いいえ、それだけじゃないわ。皇帝陛下のお力も大きいし、みんな、本当に心から警察官になりたくて訓練を重ねてきた人たちばかりだもの。巡査資格くらいは軽く通らなくっちゃ。」
「大変なのは、これからってことね。」

「そう。あと一年・・・。」
　ふと、ソフィアに悲しげな表情が浮かぶ。
「どうかしたの？」
　好子が訊くと、ソフィアは親しい友の声に心が溶け出しそうになった。涙が出てくる。
「泣いてるの？」
　好子は突然の友の涙に驚きながら、その背中をさすってやる。
「ねぇ、何か悲しいことがあるんだったら話して。私たち、もうお友達じゃないの。」
　ソフィアは、もう隠し切れないと思った。
「好子、私はもうあと四年しか生きられないの。余命宣告を受けているのよ。」
「え？」
　好子は愕然とした。この言葉はあまりにも重すぎる。だが、ソフィアが本当のことを言っているのは明らかだった。
「・・・そうだったの・・・。」
　好子は優しくソフィアの背中をさすり続けた。それが精一杯だった。

「それで、そのことは加賀警視正もご存知なのね。」
　落ち着いた頃、好子が口を開いた。
「えぇ、ご存知よ。」
「それで、恋に落ちた、と。」
「え？」
　好子の顔はまたいつもの明るい顔に戻っていた。彼女はまず自分がいつもの自分でいることが親友のために良いことだと思ったのだ。
「や、やだ！そ、そんなんじゃ。」
「あらぁ、赤くなった！さては図星だな。ま、無理もないわね。私だって、もしまだ独身だったらって思うもん。」
「好子、いい加減にしないと怒るわよ。」
　ソフィアは笑った。
「はいはい、そういうことにしときます。」
（そうよ、ソフィア、それでいいの・・・。）

　資格試験の会場を後にして、訓練生たちが警察学校に戻ってくると、セルジオ・カルルと滝田光昭、周公沢、呉章英、それに職員一同が迎えに出ていた。
「整列！」
　訓練生たちが素早く整列する。
　先頭に立っていた篤史が言った。
「出迎え有難う。全員、合格した。」
　出迎えた人々から拍手が起こった。
「みんな、今日は本当にご苦労だった。もう疲れているだろうから、全てはまた明日にする。明日は、九時から特別朝礼を開く。全員、制服を着用して参加するように。以上だ。解散。」
　敬礼ののち、各自が自室に戻っていった。

光昭が景時に話しかけた。
「君も今日からは警察官だ、藤原君。」
「滝田警部。皆さまのおかげであります。」
「いや、あくまでも君自身の結果さ。毎晩夜遅くまで鍛えているみたいじゃないか。」
「ご存知だったんですか。」
「僕だけじゃない。職員もみんな知ってるよ。訓練生たちがみんな夜遅くまで訓練を続けていたことはね。」
「実はそうなんです。特に僕はみんなから教わってばかりでした。」
「本当に立派になった。おめでとう、藤原巡査。」

訓練生たちがそんな風に会話しながら離れていくのを篤史とソフィアは微笑ましく見送っていた。
「みんな、本当に立派になって。」
ソフィアが言った。自分の後継者を誰に選ぶかはまだ決めていなかったが、一生懸命訓練に励んで目標を達成した者たちの顔を見るのは、とても清々しい気持ちだ。
「君も疲れただろう。おやすみ。」
「あの、篤史・・・。」
「うん？」
「好子が、いえ、大谷警視が・・・。」
「はは、誰だかすぐ分かるよ。彼女、君とは親しくなったんだろ？」
篤史は、彼女とは同じ職場で長かった。ともすると沈みがちになるソフィアの心を彼女が明るく照らしてくれていることを、内心では嬉しく思っている。
「それで、大谷君がどうした？」
「私、余命宣告のこと話してしまったの。」
「そうか・・・。」
「彼女、驚いてたみたいだったけど、しばらくハグしてくれて。」
「うん。」
「それに、貴方とのこと、恋に落ちたか、なんて言われちゃった。」
彼女なら、きっとそうするだろう。彼女は、大きな優しさをはち切れんばかりの笑顔の中に宿している。
「仕方ないだろう。本当にそうなんだから。どうやら僕たちは周りの誰からもそう見えるらしい。僕にはそのほうが都合がいいんだが。」
「篤史、私たちは・・・。」
ソフィアは、それから先の言葉を呑み込み、そのまま女子寮へ走りだそうとした。
「あ、ソフィア、走っちゃいけない！」篤史が叫んだ。
「今は引き留めないから・・・。」
彼女は走るのをやめ、早歩きで振り向かずに去って行った。
（ソフィア、君を苦しめてすまない・・・。でも僕はもう将来を決めてるんだ・・・。）

翌朝九時、グラウンドに訓練生たちが集まっていた。篤史とソフィアが壇上に上がると、綺麗に整列

し、一斉に敬礼する。
「みんな、おはよう。こうして真新しい制服を着て凛々しく並んでいる諸君を見ていると、本当に誇らしい限りだ。よくやってくれた。」
　篤史は全員の顔を確認するように見渡した。
「さて、これから我々は通常の訓練を終え、未知なる高みを目指す。改めて紹介しよう。忍びの技を伝授してくれる春野亜矢君と今井はるか君だ。上がってくれたまえ。」
　二人は篤史に促されて壇上に上がった。
「忍びの技はまだまだたくさんある。卒業まで、多くを学ぶように。なお、今日から三日間、水曜日の夜まで休みとする。各自、改めて復習するもよし、制服姿を誰かに見せに行くもよし、とにかく息抜きしたまえ。ただし、制服を着て出る者は、事前に私の許可を取りに来ること。以上。」
　朝礼は、そのまま解散となった。

（これからすぐ立てば、父さん母さんに会えるけど・・・。）
　リュウは迷った。だが、まだ訓練中で卒業していないのに何故帰ってきたかと叱られる可能性のほうが高い。
（やっぱり帰らずに訓練を続けておこう。そうだ、手紙ならいいだろう。）
　景時には、特に行く当てがない。もし行くとしたら両親の墓参りくらいだが、二泊三日では、慌ただしいような気がする。今回は止めておこう・・・。
　中林肇の実家も遠かった。この男三人組は普段から仲が良く、三人とも残ると知ると、三日間を訓練で過ごそうということで話がまとまった。
　他にも矢吹真知子、佐藤明日香ら、女性を含む多くの訓練生たちが残ることを決めた。
　ジェシカ・ティスードは、亡き父の墓前に報告しに行こうと思った。ここからは半日あれば帰ってこられる町にある市民墓地公園だ。母も同じ町に住んでいる。
　はるかは和菓子屋の夫婦を思い出していた。
「凛々しい制服姿を見せに来ておくれよ。」・・・。それが別れ際の女将の言葉だった。
（女将さん・・・。）
　こういう訳で翌朝、はるかとジェシカの二人がそれぞれ制服で外出することになった。

二一. 神崎リュウの手紙

　父さん、母さん、元気ですか。
　巡査の資格試験に合格しました。
　三日間の特別休暇が出たけど、まだ卒業ではなく訓練中なので、帰るのはやめておきます。

　アイユーブ警察学校は、皇帝陛下のご意向で今期から特別厳しいカリキュラムに変わったのだそうです。
　校長はオルニア警察庁本庁から赴任して来られた加賀警視正、副校長はこのカリキュラムのためにライランカから見えて新しく警視になられたソフィア警視です。他にも、科学者や言語学者など通常では考えられない分野の講師たちのご指導を受けてい

ます。

母さんからは教えてもらえなかった僕の髪の色のこと、このあいだライランカ人のソフィア警視から詳しく伺うことができました。母さんが何故教えてくれなかったかも含めて。息子の僕にも言えなかった母さんの気持ち、今は僕なりに察してます。

さて、学校での毎日は、やはり訓練、訓練の日々です。
訓練生同士で自主的に課外訓練をすることもほとんど毎日のようにあります。そうしていなければ追っつかないのです。ことにソフィア警視の法律学の講義では、週末にあるテストで良い成績を取らないと日曜日の外出の時間に復習をしなければならず、本当に大変でした。
でも、それはそれで幸せなことですよね。みんな、一生懸命です。僕もその仲間に入れてもらっているのですから。
その中でも特に仲が良くなった人たちが何人かいます。

ジェシカ・ティスード巡査。この人とは入学式の時に隣になって、僕の髪の色を綺麗だと言ってくれました。亡くなったお父さんが警察官だったそうです。
藤原景時巡査。彼は美術大学を卒業していて、みんなから画伯なんて呼ばれてます。気さくで人懐っこく、彼と一緒にいると、なんだか知らないけど安心します。
中林肇巡査。彼は法学部出身で、柔道部だったそうです。小さい時に川で溺れていたところを、通りがかったお巡りさんに助けてもらって、それで警察官になりたいと思ってきたと聞きました。
宮部淳一巡査。寡黙とは、彼のような人をいうのでしょうか、滅多に口を開きません。でもその一言が的を射ているのです。そして、かなり不思議なことですが、彼は遠くから歩いて来ても、後ろを通り過ぎるだけでも彼だと分かるのです。

卒業までにはまだもう一年あるけど、それまでどうか元気でいてください。何処かに正式に赴任するときには必ず会いに行きます。

リュウ

「なるほど。」
神崎京一は息子の手紙を読んで頷いた。
「滝田が言ってたのは、こういうことか。」
京一は滝田光昭とは同期で親しく、アイユーブに異動した際には送別会にも参加した。
オルニア警察庁きっての剣豪が指名されて行くからには、尋常ではない訓練になるだろうとは思ったし、滝田自身も「きっと面白いことになるだろう」と言っていたのだ。
だから、リュウが警察官になりたいと言った時、アイユーブに行かせた。たしかに警察官という仕事は危険を伴う。しかし、もしその危険を少しでも回避できるのなら、これほどやりがいを感じる仕事はない。
何より親として、子供が自分と同じ職業を選んでくれたことが嬉しかった。

「あの子、とうとう知ってしまったのね。」
　母親のサシャはため息をついた。
「成人するまではと思ってたんだけど。」
「リュウももう大人だ。ソフィア警視という人も、そう思ったんじゃないかな。」
「そうね、でも今までは、この話を冷静に考えるには、やっぱり大人になってからじゃないと難しいと思ってきたから。自分の外見が周りの人と違うのがずっとそのままだなんて知ったら、多感な十代の子では、おそらく絶望が希望を押し潰してしまう。」
「君の気持ちもわからんではないが、・・・とにかくリュウは上手くやっている。友達もいるようだ。もう大丈夫だ。」

二二. 先輩・後輩

　資格試験の翌々朝、篤史がジョギングに出ようとすると、校門のところで声をかけられた。
「おはようございます、加賀警視正。」
　宮部淳一が警察犬アウロラ号を連れて立っている。
「おぉ、宮部君か。おはよう。どうした？」
　普段は無口な彼が話しかけてくる時は、何かしらの理由がある。
「実は、こいつの散歩に行こうとしたら、やけに吠えるので来てみたら・・・。」
　彼は傍らのダンボールを開けて見せた。中にはまだ生まれて間もないであろう仔猫たちが三匹いた。
「捨て猫か・・・。」
「はい。とりあえず保護をと思いましたが、警視正の許可なく校内に入れる訳にもいかず、それでお待ちしておりました。」
「わかった。それなら許可する。すぐに保護してやりたまえ。早く世話してやらんとな。」
「ありがとうございます。それでは早速そのように致します。」
「そうだ、アウロラの散歩は私が代わろう。」
　篤史は少し身を屈めて、犬と目線を合わせながら頬を撫でた。犬は尻尾を振り、撫でる手を確かめるように頭を動かす。
「よし、良い子だ。アウロラ、待て。」
「ありがとうございます。それでは。」
　淳一は警察犬のリードを篤史に渡して、両手でダンボールを抱えて中に入って行った。
「真面目な奴だ。」
　篤史は微笑んで後ろ姿を見送った。
「それじゃ行こうか。アウロラ、そばへ。進め。」

　その日は、仔猫たちのことで校内が慌しくなった。特に淳一はミルクだ餌だと、あちこち走り回った。
　これには場に居合わせたほぼ全員が目を見張った。無口な彼の中にこんなに情熱的な優しさが眠っていたのかと。
　今井はるかが飼い主探しをかって出た。
「私、近くの商店街で働いてたことがあります。ちょうど今日行くので、訊いてみましょう。」

「ありがとう。助かるよ。」
　淳一が言った。

　その日の十時を少し過ぎた頃、はるかは和菓子屋の前に立っていた。ガラス越しに覗くと、店の中では見知らぬ顔の店員が働いている。
（やっぱり手が足りなかったんだ。）
　はるかは改めて和菓子屋夫婦の気遣いを思った。
　意を決して店の戸を開ける。
「いらっしゃいませー。あら、お巡りさん？」
　店員が声をかける。
「すみません、女将さんか旦那さんいらっしゃいますか？」
　女将が出てきた。
「あれ、お巡りさん？」
「女将さん、私、はるかです。この顔、お見忘れですか？」
「え・・・、は、はるちゃん？」
　女将は、しばらく彼女の顔をしげしげと見ていたが、確かにそうだと確認すると嬉しそうに叫んだ。
「本当にはるちゃんだ！まぁ、立派になって！あんた、はるちゃんだよ！」
　奥から店主も出てきた。
「なにぃ！あ、ほんとだ！ちげーねー！」
「今日は、巡査試験に受かったので、ご報告とお礼に伺いました。」
「そうかい、そうかい！ほんとによく来ておくれだねぇ。あたしゃ嬉しいよぉ。」
　それから、きょとんとしている店員に、前にうちで働いていた人だと紹介した。

「それで、女将さん。実はひとつ。女将さんにお願いができまして。」
「うん？何だい？」
「今朝、警察学校の前に捨て猫がいたらしいのです。三匹なんですが、どこか引き取り手のお心あたりありませんか？」
「おや、捨て猫かい。そうねぇ、一匹なら、うちでネズミ除けに引き取ってもいいけどね。あと二匹いるか。まぁ、学校では困るだろう、とりあえず連れてきな。」
「ありがとうございます、女将さん。」
「なぁに。はるちゃんは、あんなに働いてくれたんだし、立派なお巡りさんにもなってくれた、あたしゃ嬉しいんだよ。」
　女将の目には涙が浮かんでいた。

　はるかが店を出てすぐだった。横から声をかけてきた者がいる。
「そこの君！」
　声のしたほうを見ると、一人の警察官がいる。
「私でしょうか？」
「警察官のようだが、見ない顔だな。」
「あなたは・・・商店街入口交番の・・・。」

「おや、私がいるところを知っている？」
「私、一年前までこの和菓子屋で働いていた今井はるかです。」
「ん、今井さん・・・。そうそう思い出したぞ。たしか、和菓子屋を辞めて警察学校に・・・、あぁ、わかった！それで巡査の資格を取ったわけか。」
「はい。」
「そうか、すまなかった。もしかしたら偽者ではないかと思ってな。改めて自己紹介させてもらうよ。ムシュサル・カフラ、巡査部長だ。」
「は。アイユーブ警察学校の訓練生・今井はるかです。」
　両者は敬礼を交わした。
「で、今日は和菓子屋に挨拶に来たんだね。でも、制服着用の許可は、当然取ってあるんだろうね。」
「はい。校長の加賀篤史警視正から許可を得ております。」
「なら良い。一年前の君の武勇伝も思い出した。また頼もしい後輩ができたってことだ。」
「光栄です。それでは失礼いたします！」
　初老の巡査部長は、若き巡査の後ろ姿を見送った。

二三. 生涯の愛

　金曜日の朝。加賀篤史はオルニア警察庁本庁に出向いて行った。新年度の訓練カリキュラム内容とそれに必要な予算の承認を受けるため、とのことだった。
　そうして、土曜日には帰ってきて講師たちにそれが通ったと伝え、より一層の助力を要請した。

　その翌日の日曜日、皆それぞれに私服で休日を楽しもうと外出していく中、ソフィアもまた校門を出た。
　少し歩いたところで、ひとつの人影を認めた。
「篤史・・・。」
　篤史が自分のほうに向かって歩いてくる。彼女は戸惑った。月曜日の特別朝礼の時、話の途中で泣きそうになって離れて以来ずっとプライベートでは会っていなかったからだ。

　彼は速歩きでソフィアに近づいてきて、彼女の手を握った。
「ソフィア、大切な話があるんだ。」
　二人は一五分ほど歩いて、緑豊かな公園のベンチに来た。そこがいつも二人がプライベートで待ち合わせをする場所だった。
　ソフィアを座らせると、篤史はその傍らに腰掛け、真っ直ぐに彼女の目を見て話しかけた。
「おととい、辞表を出して来た。後任を選ぶには少なくとも三カ月はかかるからね。」
「え？」ソフィアは驚いて彼を見返した。
「どういうこと？」
「君がライランカに帰る時、僕も一緒に行く。・・・結婚しよう、ファイーナ！」
　彼が彼女を本名で呼んだのは、宮殿で久々の再会となったあの時以来のことだった。
「篤史、あなた・・・。でも、お付き合いはここだけって、約束したじゃない。」
「それがそうはいかなくなった。君も同じはずだ。違うか？」

二人は見つめあった。ソフィアは、はっとして目線を背けようとしたが、篤史が両手で彼女の頬を挟んでそれをさせなかった。
「僕は、君が幸せそうに微笑むのを見たい！ずっと側にいて守ってやりたいんだ！」
「だけど、この国の補佐は？あなたはここにはなくてはならない人なのよ。」
「それは心配ない。紫政帝陛下と皇太子殿下にお仕えして十数年、僕の知識はしっかり伝わっている。陛下におかせられても、君とのことはすっかりお見通しだったよ。暇乞いに伺ったら、それなら全力を尽くして愛せと言われた。僕もそのつもりだ。」
「私・・・。どうすればいいの。・・・」
彼女は本当にどうしたらいいのか分からなくなった。断る理由は全て消され、愛されている喜び、切なさ、愛しさや不安が一度に押し寄せてきたのだ。
そんな彼女を篤史が力いっぱい抱き寄せる。ガラスのように壊れやすい体と心、 始めの頃はただ温めていたいだけだった。だがここ数カ月前からは、そんな感覚を大きく超えた何かに突き動かされている。
「僕は君を愛してる！もう決めたんだ、ファイーナ！僕は君の公卿になる！」
公卿とは、女性王族の伴侶を言う。妻の王族を支え、妻なき後も再婚することなく生涯を終えるのだ。
「篤史、あなたはそこまで考えて・・・。そうよね、あなたはとっても思慮深いもの。」
篤史が唇を重ねる。抵抗はもはや皆無だった。
「そばにいて、篤史。･･･そして、これからはファーニャって呼んで。」
ライランカ人の名前はその殆どが正式名と愛称形とが対になっている。愛称形は家族や親しい者たちのみに許される呼称であり、それを相手に教えることは、自ら親愛の意を示すことになるのだ。
彼女は初めて相手の背中に自分の手を回した。そうしたことで、意図せず彼女の胸の膨らみが夏服の薄い生地を通して篤史に触れた。
「ファーニャ･･･。」
（やっぱり君は女の人なんだね。なんて柔らかいんだ・・・。）

やがて街の大時計が正午を知らせた。
「あぁ、もう昼か。お腹が空いたな。どこかに食べに行こう。」
篤史は彼女を連れてレストランに入った。メニューを覗き込む。
ふと顔を上げると、ソフィアが微笑んでいる。彼は自分といるときにソフィアが笑っている顔を見たことがない。
「ん？何か可笑しいか？」
「ううん、なんでもない。」
「なんでもなくないだろう、笑ってるじゃないか。」
「ごめんなさい。なんだか貴方の顔が無邪気に見えて。」
「そうかぁ？ただ食べ物のことを考えていただけなんだが。」
あぁ、やっと安心してくれたんだ。その笑顔がずっと見たかった・・・。

二四. 父として

求婚の日から五日後の、ライランカ・湖畔宮殿・・・。

環境局長官のイリーナ・タラノヴァがアルティオ帝と会っていた。
「陛下、申し訳ございません。誠に恐れ多い事態になりました。」
「どうした？」
イリーナは兄から来た手紙を差し出した。
「オルニアにいる我が兄・ライブラが、ファイーナ様と結婚の約束をしたそうにございます。」
「何？！」
アルティオは手紙を読んだ。そこには、ファイーナ姫にプロポーズしたこと、自分もライランカに行って、公卿になるつもりだと書かれていた。
「あのライブラが・・・。」

一五年前、一六歳になるファイーナが将来的に即位するにふさわしいか否かを外部から見極めてもらうために、アルティオは他国から幾人か人を招いた。イリーナを介して呼び寄せた加賀篤史ことライブラもその一人だ。彼は一時間ほどファイーナと会話した後、ファイーナについて父帝にこう進言した。
「姫様は、実務的には無難にこなされるでありましょう。しかしながら、それ以上に国民から慕われる名君となられるかとも存じます。皇帝は、国民からの信頼がなければなりません。慕われ、敬われる存在でなければなりません。姫様は、その素質をお持ちです。」
彼は年齢を考えるとだいぶ落ち着いた雰囲気を感じさせる青年だった。ファイーナもきっとそんなところに惹かれたに違いない。

暫しの静寂の後、アルティオ帝は口を開いた。
「リーナ、私は嬉しい。あの娘が結婚できるとは思っていなかった。それも、相手が君の兄上となれば、これほど確かな身元はないじゃないか。」
「陛下、そのお言葉は光栄に存じます。しかし、私どもは皆、それぞれの国にお仕えしている臣下にございます。それを、兄に限って姫様に恋愛感情を抱くなど・・・。」
「リーナ、私たちは君たちとはそんなにも遠い存在なのかな？皇帝とは、単なる立場、職業に過ぎん。今更君に言うまでもないが、皇帝は迅速な行政と議会の暴走防止のために置かれているのだ。それに今回、次期皇帝は、オルニア市民から選ばれて来るのだよ。」
「あ・・・確かに仰るとおりでございます。次の皇帝陛下は、ファイーナ様が市民の中からお選びになるのでした。」
「得心がいったかね。」
「はい。」
「それにしても、あの娘の花嫁姿を見られようとはな・・・。カナリアがいたら、どんなにか喜んだことだろう。」

アルティオは翌朝から動いた。
侍従長にファイーナの結婚式と次期皇帝候補者の立太子礼を合わせて来年十月に行う意向を示し、その準備を命じたのである。来賓の選定やスケジュール調整もあるため、全ての手配にはどうしても半年くらいはかかるのだ。
後日ファイーナからも手紙で婚約の許しを乞うてきたため、アルティオは、すぐに返事を認めた。

お前がそうしたいなら、遠慮することはない。彼のことは覚えている。しっかりした男だ。安心して連れておいで。ただし、次期皇帝候補を決めることも怠るなよ。結婚式と立太子礼の手配も、もう来年十月に行うように侍従長に指示したから、そのつもりで覚悟しておきなさい。

父

「お父様ったら・・・。」
ファイーナはくすっと笑った。婚約を快諾してくれたのは何よりだったが、結婚式の日取りまで即時手配とは。相変わらずなんて手早いんだろう。
「だけど私も、そろそろ後継者を誰にするかを決めなくてはいけないわね。一年いて、もうだいぶ皆んなのことを把握できているはず・・・。」

二五. 発作

その年の秋雨はいつもより長く降り続いた、そして、ようやく澄み切った空が綺麗な夕焼けを醸し出す日が多くなってきた頃・・・。
アイユーブ警察学校では、馬術訓練が始まっていた。春野亜矢が手ほどきする。
「みんな、馬術では特に馬との信頼関係が大切です。わかりやすい指示を出すように心がけてください。それに、馬は犬より繊細で臆病です。忘れないでくださいね。」

実技訓練が終わって、皆が寮に戻りかけた時だった。
それまで見学していたソフィアが、立ち上がりぎわに不意に膝をついて倒れた。
「ソフィア警視！」
彼女の意識は一旦そこで途絶えた。

その後のことは、医務室で目が覚めて、篤史から詳細を聞いて知った。
ソフィアが意識を無くしていると見るや、亜矢はソフィアの上着のポケットから非常用の口内服用薬を取り出して口の中に含ませた。
「警視、お薬です！」
これは意識を失っている患者でも安全に服用できるように、口の中で溶けて作用する。訓練生たちも日頃ソフィア自身から、もし自分が倒れたら口に含ませてくれと言われていたのである。
「僕が医務室に運びます！」
藤原景時がソフィアを背負い、亜矢がそれを手伝う。神崎リュウが校庭を懐中電灯で照らしながら先導した。空は帳を下ろそうと一気に暗くなってくる。
「こっちへ！僕についてきて！」
景時と亜矢が続く。
ジェシカや他の訓練生たちはソフィアの身を案じながらも邪魔にならないように離れて見守っていた。
セルジオ・カルルが叫んだ。
「みんなも心配だろうが、あとは彼らに任せなさい！自室に戻ってくれ！」

「私、加賀警視正にお知らせします！」
　ジェシカが走っていった。

　医務室には校医のマイサ・サマニーがいて、ソフィアが意識を無くしているのを見ると、看護師を残して部屋を出るように指示して措置を始めた。
　篤史が飛び込んできた時には、ソフィアはもう落ち着いて、安定剤を打たれて眠っている状態だった。
「ソフィアが倒れたって？」
「あ、加賀警視正、こちらです。もうだいぶ落ち着かれています。」
　彼はソフィアの傍らに腰を下ろすと、彼女の手を振りしめた。
「それで容体は？」
「発作自体は軽いものと思われますが、病が病です。念のため、浅川総合病院の山形先生にも連絡しました。おそらく駆けつけて下さると思います。」
「ありがとう、先生。このままここにいてもいいだろうか？」
「加賀警視正・・・。わかりました。山形先生が到着されるまで、警視のお側にいて差し上げてください。」
　女性医師は彼の言動と表情からすべてを悟り、速やかに隣の診察室に移動した。
（ファイーナ・・・。頼む、目を開けてくれ・・・。）

　山形かなみ医師が着いたのは十時頃だった。
　ソフィアを詳しく診察すると、彼女は診察中外に出ていた篤史に言った。
「このところの長雨と疲労で発作が出たものと思われます。何日か休養されることをお奨めします。ところで貴方は、この方の本当の病名をご存知なのですか？」
「はい、病名は彼女自身から聞いています。不治の病だということも。」
「そうですか。それならもう改めて申し上げることはございません、できる限りのことはマイサ先生と私とで分担しています。でも、どうか大切にして差し上げてください。」
「よろしくお願いします、先生。」

　ソフィアが目を覚ましたのは明け方である。目の前には白い天井があり、どうやら自分は横になっているらしい、というのがわかった。
　横を見ると、篤史が自分の手を握って眠っている。
「篤史？」
　その声に彼も目を覚ました。
「ファーニャ・・・よかった、気がついたんだね。」
　彼はソフィアの頬に軽く触れた。
「君は馬術訓練のあと倒れたんだ。覚えてる？」
「ううん、全然わからない。」
「そうか。ここは医務室だ。藤原君が運んできて、マイサ先生と山形先生が措置して下さったんだよ。」
「そうだったの・・・。あら、山形先生は浅川のはず・・・それじゃわざわざここまで？」
「そうだよ。馬車を飛ばして来て下さったんだ。」
「あとからお礼を申し上げなくちゃ。それにあなたにも。ずっといて下さったのね。」

「何言ってるんだ、当たり前じゃないか。君がお礼を言うのは、先生たちと看護師さん、それに藤原君と春野君、神崎君とジェシカ君だ。あ、まずはマイサ先生を呼ばなくては！待っててくれ。」
　マイサが来て、少し話をした。
「先生、本当にありがとうございます。それに、もしかしたらずっと待機していて下さったのではないですか？山形先生にも連絡して下さったと聞きました。」
「発作はもう大丈夫ですよ。おそらく、このところの長雨とご心労が一時的な発作を招いたのでしょう。医師としては数日のご静養をお勧めします。」
　そのあと、篤史が戻ってきて、ジェシカが報告してくれた部分も合わせた一連の経緯を事細かに説明した。
「先生から聞いたと思うが、今の君には静養が必要だ。今日から三日間休暇を取りなさい。これは校長命令だ。」
　篤史は半ば戯けて聞こえるように言って、彼女の髪を撫でた。

　しばらくして、起き上がって動いてもいいとマイサから許可をもらったソフィアは、馬術訓練が行われている校庭に行った。
　訓練生たちが集まってくる。
「警視、もうお身体は大丈夫ですか？」
「えぇ、皆さんにもご心配をおかけしました。もう大丈夫よ。長雨と、少し疲れたみたい。でも、念のため、三日間休暇を取ります。皆さん、本当にありがとう。一言お礼を言いたかったの。」
　ソフィアは深々と一礼して寮のほうに戻って行った。
（嘘、本当はお辛いはずなのに・・・。）
　亜矢とはるかはそう思った。

二六. 忍びの講義

　ソフィアの休暇二日目は水曜日で、彼女は浅川総合病院に来ていた。
「山形先生、一昨日はどうもありがとうございました。」
「いいえ、大事に至らず、良うございました。何よりどうかご自愛下さい。御身に何か差し支えがあれば、私もナディア医師に顔向けできなくなります。この病は油断してはなりません。しかし、たまには適度な気分転換が必要ですね。」
　医師は、ソフィアの目を見て言った。
「もしまた何日かまとまった休みをお取りになりましたら、アリョルカという温泉にいらしたらいかがかと存じます。そこは、ライランカ人が多く住んでいて、きっと懐かしく感じられますよ。」
（ライランカ人が多い・・・。身元はわからないかしら？）
　ライランカの人口は大陸全土で約五千万人。半数が農業や畜産、林業に従事していて、国外に出る者は少ない。神崎リュウの母もその一人だが、ライランカ人同士が国外で出会うことはまずないのである。
（そうね、一度、リュウ君のお母様にお会いしなくては・・。）
　ソフィアには、ある考えがあった。

　馬術訓練が終わる頃、学校の廊下のあちこちにテーブルが置かれ、その上にボールやビー玉、物差し、

輪ゴム、独楽、小さな木の塊、模造刀、模造のナイフ、手裏剣、ダーツの的などが置かれたり掛けられたりし始めた。
「忍びは、ありとあらゆるものを利用します。皆さんも日頃から箸やコップ、カゴや本など、身の回りにあるあらゆるものを扱い慣れておいてください。」
　今井はるかはそう言いながら、ナイフを手に取って二,三回手の上で転がし、壁に向かって投げた。ナイフは、壁に貼られた的の中央に刺さった。
「おー・・・」
　訓練生たちの中から歓声が上がる。
「感心してちゃダメ！貴方たちがこれをやるの！基本は、ものの扱いに長けること。いい？」
　それから、呼び寄せておいた女性事務員に、人質役になってもらうように改めて頼んだ。
「セロさん、立てこもり犯になって下さい。」
　セロさんというのは、セルジオ・カルルの愛称である。趣味でチェロを弾くのでこの仇名がついた。
「ほいきた、任せろ。・・・おい、武器を捨てろ！この女殺すぞ！」
　なかなかの演技だ。さすがに隙がない。
「わかった！捨てる！」
　はるかはその場でナイフを捨てた。・・・と、落ちたナイフを足ですくい上げるや否や、間髪入れず投げた。
「お！」
　セルジオは不意に顔のすぐそばを掠めたナイフに一瞬気を取られた。普通の人間なら、ここで手にした刃物を取り落としていてもおかしくない。
　その瞬間、はるかは二人の間に割って入り女性事務員を全身で庇いながら、セルジオに足払いをかけ、彼をねじ伏せてしまった。ほんの一瞬の出来事だった。

「容疑者はサーベルの使い手、でも人質はずぶの素人。こんな場面は結構あると思います。でも、そこをなんとか処理するのが私たちなのです。何でも利用するというのは、こういうこと。お二人ともありがとうございました。」
　亜矢を除いて一同は漠然としていた。これが忍びの技か・・・。

　そして、はるかが続けて放った一言に、一同はさらに驚愕することになる。
「本来の忍びなら、狙いは外さない。顔でも心臓でも構わず傷つけるけどね。警察なら肩や手足かな。」

二七. 市内観光

　休暇の最終日、篤史は自らも休暇を取ってソフィアをアイユーブの街中に連れ出した。
「折角だから、君も異国情緒を楽しむといい。僕がついてるし。今まではずっと仕事絡みでしか歩いてなかったんだろ？」
　そういえばそうだ。この街にいても仕事に夢中で、周りの景色など目に入らなかった。
　遊園地や高台にある展望台、露店が集まる大通り、花屋、定食屋、スパイス市など、篤史は彼女を庶民的な場所に案内した。彼女は我を忘れて周りのいたる所に興味を示した。時には無邪気な笑顔も見せる。

（本当に可愛いなぁ、君は。）
　篤史は、抱きしめたくなる衝動を抑える。自分が抱きしめてしまうと、彼女はまた愁いを帯びた彼女に戻ってしまうような気がしたのだ。

「ありがとう、とっても楽しかったわ。」
　警察学校に帰る途中、あと少しになった所で、彼女は篤史の腕を取って歩き出した。
「篤史、あれだけ時間があったのに、どうして抱きしめてくれなかったの？私が街のあちこちに夢中だったから？」
「ファーニャ・・・。」
「確かに夢中だったわ。本当に楽しかった。
　でも、貴方はどうだったの？さっき馬車の中で気が付いたの。貴方は、本当は私だけを見ていたんじゃないかって。」
　篤史は、足を止めて彼女を抱き寄せた。
「その通りだ。僕は君が全てを忘れて笑顔になるのをずっと見ていた。君の笑顔が欲しかった。眩しかったよ。そして、この上なく可愛い・・・。」
　彼の腕の力が強くなった。愛おしく彼女の藍色の髪を撫で、頬に触れながら見つめ、深く口づけた。
「私、今日はもう貴方しか見えない・・・。」
「ファーニャ、僕は君を愛している。愛おしくて堪らないんだ・・・。」
　二人はしばらくその場から動かなかった。

二八. 校長室にて

　二月、雪がうっすらと街を白く染めていたある日、景時は校長室に呼び出された。入っていくと、篤史だけではなく、ソフィアも手前の椅子に座っていた。
「呼び出してすまなかったね。掛けてくれたまえ。」
　篤史が言った。穏やかで優しい、いつもの顔だ。
「は、それでは失礼いたします！」
　景時は、ソフィアが手で指した席に座る。
「実はね、今日は私からお願いがあるの。」ソフィアが言った。
「はい、何でしょう？」
「貴方には画家を志していたところをスカウトして来ていただいたのだけれど・・・。」
「はい。」
「私は今、貴方の人生を再び変えようとしています。私の本当の名はファイーナ、ライランカ皇帝・アルティオの娘です。」
「えっ？」
　景時は驚いて彼女を見た。初めて会ったあの日から、彼女には普通とは違う何かを感じてはいたが、まさか姫君だったとは。
「さすがにあまり驚いてないみたいね。」
「え、いえ、とても驚いております！」
「でも、薄々何か違うとは思ってた。」

　まさしくその通りである。
「はい。」
　景時は素直に答えた。
「実は、私はもう長くは生きられません。私の寿命はあと三年余りしかなく、もう即位は考えられないの。だから、短期間で後継者を育てることにして、今までこの学校にいたのです。・・・藤原景時さん、私は貴方を次期ライランカ皇帝に選びます！」
「えっ、ええええっ？！」
　今度という今度はもう驚きを通り越して言葉も出ない。僕が皇帝になる？そんなことはまるで考えたこともない。まるっきり僕の範疇を超えている！
「もちろん今すぐここで決断を求めたりはしません。五月いっぱいまで待ちます。ゆっくり考えて。だけど、私が貴方を選んだのは、やはりあの出会いの日の貴方の行動と、親しみやすさ、謙虚さ、弛まぬ持久力などを総合的に見た結果なのです。」
　景時は話を聞いているうちに、彼女が言おうとしていることがだんだん分かって来た。気持ちに少し余裕が出てきた彼は、気にかかっていることを訊いてみる気になった。
「では、お返事は後日近いうちにさせていただきます。その前に、一つだけお尋ねしてよろしいでしょうか・・・。大変不躾なことを伺います。姫様におかれましては、加賀警視正とのご結婚は考えていらっしゃるのですか？」
「え？」今度は彼女のほうが驚いた。
「もし僕がこのお話をお引き受けするとして、その場合にとても大切なことなんです。姫様のお幸せそうな日々を見ながら皇太子の修業をするか否か、ということですから。」
「君が言いたいことは分かるよ。」篤史が言った。
「僕たちはライランカに帰ったら結婚する。そのことは、彼女のお父上・アルティオ帝陛下のご了承も得ている。」
「わかりました。それでは後日改めてご返事申し上げます。・・・失礼いたします！」
　景時は静かに退室していった。
「彼、引き受けてくれるかしら・・・。」
「きっと来る。あんなことを訊いてくるんだからな。」

　同じ日、今度はリュウが呼び出された。
「突然呼び出してすまなかったね。掛けてくれたまえ。」
「は、失礼いたします。」
「実はね、明日から二泊三日で彼女と籠野市に出張して欲しいんだ。」
「籠野市へ？」
　籠野市には、リュウの家族がいる。
　今度は、ソフィアが口を開く。
「もうそろそろ皆んなの赴任先を決めなくてはと思っていてね。貴方、ライランカ警察本庁に行く気はない？」
「えっ、僕がライランカへ？」
　彼は驚いた。ライランカは母の故郷ではあるが異国の地である。

「実は彼女は、ライランカ皇帝・アルティオ帝陛下のご息女・ファイーナ姫なんだ。」
　篤史が説明する。
「えっ？！」
　リュウは、只々驚くばかりだった。一国の姫君がこのような場所にいるとは！

「驚かせてごめんなさい。でも本当なのよ。」そのあとは彼女が続けた。
「私がここに来ているのは、実は次期皇帝を育てて連れて帰るため。でも、その人に一人だけで異国に移ってもらうのは心配な点もあります。そこで、貴方についていてもらえたら、と。」
「つまり僕は次期皇帝の話し相手・・・。」
「そう。話し相手であり、また時には苦言が言える友となって欲しいとも思っています。」
「なんか、あまりの事に実感が湧きませんが、なぜ僕を？ライランカの血が流れてるからですか？」
「いいえ！」
　彼女はかぶりを振り、語気を強めた。
「貴方は弱い立場の人の心を知っている。私はそういう人が手元に欲しいの！逆に、ライランカに赴任して、髪の色が変わると、貴方のアイデンティティに大きな影響を及ぼすかもしれないけど。」
「僕のアイデンティティ・・・。」
「だから、貴方と、貴方のご家族とでよく話し合って決めて欲しいのよ。私の話を聞いた上で。とりあえず籠野へは一緒に行ってくれますね？」
　この人は、僕の人格を見込んでくれてるんだ、とリュウは思った。幼い頃はずっといじめられていた自分を、辛い毎日は自分の性格のせいではないかと悩んでいた自分を、自分とは何者かを問うてきた自分を・・・。
「かしこまりました。警視・・・ファイーナ様のご希望とあれば、どこへなりとお供いたします！」
「ありがとう。」
「でも、次期皇帝って誰なんですか？」
「それは。まだ本人の了解を取っていないから、今は明かせないわ。ただ、貴方とも親しい人、とだけ言っておきます。」

「頼んだよ。それから、このことは皆んなには内密にな。」篤史が言い添えた。

二九. 守りの剣

　校長室を出た後、景時はしばらく自室に戻って考えた。その日だけではなく、数週間のあいだ自室にいるときはずっと考え続けた。廊下への扉を開けた外では、いつ誰から不意打ちが来るか判らない。そんな訓練が一カ月続いている時期で、じっくりと考えられる場所は自室しかなかったのである。

　僕がライランカの皇帝に？
　昔、ライランカの帰化は特殊なものだという噂を聞いたことがある。帰化礼があり、新たな名前を与えられるのたという。今回の話を受ければ、僕もその帰化礼を受けるのだろうか？それに、おそらく名前も変わることになる。少し堅苦しい名前だが、今は亡き父が名前負けせぬようにと敢えて付けてくれた名前だ。それが変わることになる・・・。

彼の父は樹木医で、大陸中あちこちに治療に出ていて、ほとんど不在だった。
いつも一人で遊んでいた彼を心配した母は、できるだけ近所や学校の子供たちと一緒に遊ばせた。
「いっぱい遊ばないと、いい大人になれないわよ。特にあなたより小さい子のことは、よく面倒見てあげなさい。あなたにもそういう時があったんだから。」それが母の口癖だった。
またある時、上級生と軽い喧嘩をして帰った時は父からこう言われた。
「自分より強い者にも立ち向かうのは良いが、決して深い傷を負わせてはいけない。擦り傷や打撲程度に加減しなさい。それが喧嘩のルールだ。」
その両親は、彼が大学の寮に入っている時に火事で亡くなった。突然のことだった。
（父さん母さんが見てたら何て言うだろう・・・。頼まれたことはやり抜けと言うだろうか・・・。）

そもそも僕に皇帝という重責か担っていけるのか？ソフィア警視と加賀警視正が見込んでくれたからには、きっとそれなりの理由があるはずだが、自分ではそうは思わない。
それにしても、ソフィア警視のお命があと三年だなんて！あの微笑みがあと三年だなんて！
あのときは、次期皇帝という話で頭が真っ白になってしまったけど、ソフィア警視のことを考えたら、あまりにも悲し過ぎる！
いつか警視が加賀警視正の胸の中で泣いていたのも、もしかしたらそのせいだったのか。そして警視正もそのことを受け入れて、今日まで愛を育んで来られたのか。男として放って置けない、そんなお気持なのかもしれない。きっと、そうしてご結婚を決意されたのだ。
僕も、お二人の幸せをお側から見届けたい！なんだかわからないけど、そうせずにはいられない！一体この気持ちは何だ？！
でも、この話を受けるということは、僕が皇帝という重責を担うことだ。髪の色が変わり、名前も変わるということなんだ・・・。

その頃・・・オルニアの紫政帝は、全大陸の皇帝立会いの元に開かれた国際剣術連盟の年度総会に出席し、自ら新たな階級の創設を提案していた。警察官独自の守りの剣だ。柄（つか）と鞘（さや）の色は黒、そこまで決めていた。
「近々ある国際剣術競技会で、その技を皆さんにご覧に入れたいと思うのじゃが、如何だろうか？」
ライランカのアルティオ帝もその場にいた。柄と鞘の色については初耳だったが、もちろん娘からもその話を聞いている。
「やってみましょうか。守りの剣というのも面白い。しかし、判断はあくまでも皆さんの合議にお任せする。」
その言葉で場の雰囲気は前向きな方向へと向かった。

その日の夜、紫政帝とアルティオ帝は、滞在先のホテルの特別室で会った。
「この度は、ライランカ次期皇帝育成のために、ひとかたならぬご協力をいただき、お礼の申し上げようがございません。」アルティオが頭を下げた。
「いやいや、わしのほうこそ、新しい剣術階級の提案を後押ししていただき、有り難く存じますぞ。あれはわしの長年の夢です。ファイーナ姫もよくやって下さった。」
「そうでしょうか。ご迷惑ではございませんでしたか。」

「とんでもない。あれほど有能な法律学の講師はなかなかいないと、ライブラが申しておりました。おっと、彼はもうすぐ貴方の娘婿になるのでしたな。失礼した。」
「しかし、本当によろしいのですか？貴国の補佐役をライランカにいただいて。」
「そりゃ、本人たちが愛し合ったものをどうこうすることは誰にもできますまい。」
「確かに。誠に恐れ入ります。」
「それに、二人の心に火をつけてしまったのは、他ならぬわしかもしれませんのじゃ。」
　そう・・・二人を引き合わせたあの日、運命の矢は放たれたのだ・・・。

三〇. 剣術競技会

　四月、国際剣術競技会が開催された。全世界から名だたる剣豪が名を挙げようと集まってくる。
　その中の一つ「警察官部会」に、アイユーブ警察学校の訓練生全員を引率してきた篤史の姿があった。さらに、セルジオ・カルル、 滝田光昭、今井はるか、春野亜矢の講師陣も一緒だ。
「皆んな、ここが正念場だ。これまでの訓練の成果を遺憾なく発揮してくれ。新しい剣術階級が認められるかどうかは、今まさに諸君にかかっている。」
　篤史はそう言い残して観覧席へ向かい、紫政帝に近づいた。
「紫政帝陛下。」
「おぉ、来たか。こちらに座りなさい。」紫政帝は自分の隣の席を指した。
「は、失礼いたします。」
「いよいよじゃのう。」
「はい。」

　認定試験が始まった。
　各国から有段者が来ている。セルジオと光昭を除く、アイユーブ警察学校の訓練生たちは、その剣豪たちをことごとく打ち負かし、それぞれ初参加にして二段以上の認定を受けた。
　対戦した相手の有段者たちは、あることに気づいた。誰ひとりとして急所を狙ってはおらず、相手の武器を完全に封じてからねじ伏せているのだ。見事としか言いようがない。
（それならば、これはどうだ！）
　貴賓席にいた一人が念力でそこらにあった石を一五、六個、彼らに向けて飛ばした。が、彼らはそれに動じることなく石を全木刀てや肘当てで叩き落とした。
「ほう、見事だ！それが新しい剣術階級の所以か！」
「あれは？」
　見知らぬ人物からの突然の攻撃に、ジェシカが呟いた。
「あの方は・・・。不可思議の国ウユニのオンネト帝陛下だわ。」
　亜矢が答えた。忍びは、世界の要人の顔や名前を熟知している。
「ウユニというところはね、超能力者の国なの。たしか、オンネト帝陛下ご自身は、テレキネシスの達人だったと思う。明朗快活で剛健な方だという話よ。」
（あの一カ月の訓練は、こういう時のためだったのか。）
　はるかと亜矢以外の参加者は思った。いつ、いかなる場合でも対処できるように・・・それが警察官なのだと。

「いや、失礼した。大したものだ。これほどならば、警察官級の創設を認めようではないか。」
　オンネト帝は、がっしりした体格を大きく揺らしてカラカラと笑った。
　その後に開かれた会合で、警察官級の創設が認められたのは言うまでもない。剣は後日届けられることになったが、結果としては成功だった。
「皆んな、よくやった！」篤史が言った。心からの笑顔だった。

　そこへ、紫政帝が一人の人物を連れてやって来た。篤史が紹介する。
「こちらは、紫政帝陛下にあらせられる。」
　全員パッと敬礼する、皇帝の顔を知らなかった者のほうがほとんどだったが。
「陛下は、警察官級剣士の提唱者でもあらせられるが・・・陛下、そちらの方は？」
「この度は皆ご苦労であった。新たな剣術階級の実現は、わしにとって長年の夢であった。さて、こちらは、海洋警察のマーベラス長官だ。亜矢、こちらに来なさい。」
　海洋警察？それじゃ・・・？！亜矢は胸を高ぶらせた。
「はい！」
「マーベラス長官、これが先程お話しした春野亜矢です。使ってやって下さるかな？」
「はい、もちろんでございます。当方と致しましても、優れた人材は出来るだけ多く欲しいところでございます。」
　それから、マーベラスは亜矢に話しかけた。
「海洋警察のマーベラスだ。話は陛下より伺った。海洋警察に来てくれるかね？そして、目的の人物が見つかったら、ゆくゆくは講師として後進の育成に当たって欲しい。」
「はい！」
　亜矢は敬礼した。それから、紫政帝と篤史に深々と頭を下げた。
「紫政帝陛下、加賀警視正、本当にありがとうございます！」
「よかったね」と、皆が変わる変わる寄ってきてハグした。

三一. 親友ふたり

　剣術競技会の翌朝、久しぶりに特別朝礼が開かれた。
「おはよう。昨日も本当によくやってくれた。私も諸君を誇りに思う。さて、これから諸君はいよいよ実際の現場に配属されるわけだが、赴任先に何か希望があれば、その旨教えてくれ。特にない者については、私とソフィア警視とで決めさせてもらう。より多くの警官に諸君の技術を広めるため、かなりばらばらに配属先を決めなければならないが、許してくれたまえ。」
　篤史はそう言って各人を見渡した。今では彼らがまるで自分の子供たちのようだ。亡き父上も、我々を手放した時にはこんな心境だったのだろうか。
　あれから、七人きょうだいのうち三人は役人になって直接行政に携わっているが、二人は船乗りに、またある者は楽師に、そして僕は警察官になった・・・。

　篤史は続けた。
「あとは諸君の赴任先を決めるだけとなったため、今週末の土曜日から一週間、完全な有給休暇期間と

する。遠出も許可する。各自、届け出るように。以上だ。」
　帰ろうとすると、篤史とソフィアは景時から呼び止められた。
「待って下さい、加賀警視正、ソフィア警視！」
「うん？」
「はい？」
「このあいだの件でお話ししたいのですが。」
「わかった、一緒に来たまえ。ソフィアもいいね？」
「はい。」

　校長室に入ると、篤史とソフィアは景時からの言葉を待った。
「僕、ライランカに行きます！果たして僕なんかに皇帝という重責が担えるかどうかは分かりません。正直、ずいぶん迷っていました。でも、昨日いきなり段位が取れて、オンネト帝陛下から不意打ちを掛けられてわかったんです。僕たちには並々ならない知識や技術が詰め込まれているんだ、って。」
「カゲさん・・・。ありがとう！どうかライランカを頼みます。」
　ソフィアは、彼の手を握った。景時を画伯と呼ぶ者がいる一方で、カゲさんと呼ぶ者もいる。ソフィアもそうだ。
「男なら何でも挑戦してみろ、父ならきっとそう言うでしょう。父は、そんな性格でしたから。」
「そうか。立派なお父さんだったんだね。」篤史が頷いた。
「今週、墓参りに行って報告します。湯井岡市にあるのですが、よろしいでしょうか？」
「では、私たちもついて行きましょう。大切なご子息をお預かりするのですから、親御さんにご挨拶しなくてはいけません。」
　ソフィアが促した。
「もちろん構わないよ。そうだね、君の言う通りだ。」
（警視正は警視を見る時はどこか違う・・、やっぱり特別なんだな・・・。）
　景時は実感した。

「そうそう、リュウ君にも知らせないとね。」
　ソフィアが思い出して言った。
「リュウに？何を知らせると？」
　景時が驚いて訊き返す。何故ここで彼の名前が出てくるのだろう。
「実はね、彼にはライランカ警察庁に行ってもらうことになっているの。次期皇帝の話し相手になってもらえたらと思って。でもその時は、まだ貴方の承諾を得ていなかったから、相手が貴方だということは明かしていないのです。」
「リュウが僕の話し相手に・・・。」
「異国の地で暮らすことは大変だと思います。特に役職が上がれば上がるほど孤独になるでしょう、そんな時、二人して支え合ってもらえたらと思うのです。少なくとも貴方たちそれぞれが結婚して新しい家族が増えるまでは。」
「結婚・・・家族・・・。」
　考えもしていなかった。でも、確かにいつかは僕も結婚する。その日はいつか来るんだ！

「でも、警視と警視正がいらっしゃるじゃないですか？」
　景時は不思議に思った。ライランカに帰ったら、ずっと一緒に宮廷で生活するはずだからだ。
「カゲさん、私はいなくなるのよ。それに彼は・・・貴方、彼にはどうしても遠慮が残るんじゃない？本当に気兼ねなく何でも話せるって言い切れる？」
　ソフィアは至って冷静だったが、景時は自分が悪い質問をしてしまったように思い、返事を返すことができなかった。

　それから、篤史が内線電話でリュウを呼び出した。中に入ってきたリュウは三人を見て言った。
「あの、もしかしたらライランカの件ですか？」
「さすがに察しがいいわね。ライランカ次期皇帝内定者というのは彼、カゲさんなの。たった今、承諾してもらったばかりだけれど。」
　ソフィアが景時を見て言った。
「景時、皇帝内定者は君だったのか！」
　リュウは景時をまじまじと見た。
（確かにこいつとならやっていける。こうして見ると、こいつだったら皇帝が似合うかもしれないな。）
「あぁ、ずいぶん迷ったんだけどな。君もライランカに行くそうじゃないか。よろしく頼む。」
　景時もリュウを改めてじっくりと見た。
（彼が相棒か。確かにお互い仲良くやってきた。気心の知れている友だ。・・・）

「結局、ライランカにはこの顔触れで行くのか。それじゃ、神崎君も藤原君のご両親のお腹参りに一緒に行かないか？三人で報告に行くことにしたところなんだ。」
　篤史が提案した。
「あぁ、いいかもしれませんね。そして籠野市にも寄ってね。」
　ソフィアもそう言った。
「籠野市？」景時はその理由を知らない。
「僕の家族がいるんだ。湯井岡からは半日くらいかかる。」
　リュウが説明した。

三二. オルニアの人々

　六月、篤史の後任として、ナジブ・イスクムという警視正がやってきた。当地アイユーブから少し離れたザイマバ市の出身だが、篤史とはすでに顔見知りで親しい。
「篤史、今度、辞任するそうだな。」
「あぁ。」
「君ほどの男を失うのは惜しいが、やはり愛の力は偉大だということか。」
　篤史がライランカへ行くために辞めるということは、すでにオルニア警察に所属する四〇人ほどの警視正たちに伝わっていた。
「否定はしない。ただ、住み慣れた土地を離れるというのはやはり少し寂しいものだな。」
　そして、真剣な表情でこう言った。
「ナジブ、君も剣術競技会で見ただろうが、今のアイユーブ警察学校は現時点で最強の技能を有してい

る。講師を何人か残すつもりだから、くれぐれもあとを頼む。」
「わかってるって。僕を信じてくれよ。ははは。」
　ナジブはそう言って篤史の肩を叩いた。実際、ナジブも警察官の厳しさと度量の大きさを兼ね備えている男だった。指導者として申し分ない。紫政帝に後任として彼を推したのも実は篤史自身である。
「それにしても、君の嫁さん、すごい美人だな。どうやって口説いた？ん？」
　彼はニヤッと笑った。男同士の会話では、そうやって色恋事で相手をからかうのも嗜みの一つである。
「ナジブ、君なぁ・・・。」
　さすがの篤史も、これには言葉に窮した。まさか相手が姫君で、それを補佐し警護すべき自分が半ば強引に抱きしめてキスしてしまったのが始まりだった、とまではたとえ友であろうとも恥ずかしくて言えない。
「おやおや、真に受けたか。君は相変わらず堅物のままと見える。まぁ許せ。僕だって野暮は言わん。そろそろコーヒーでも飲まんか。」

　篤史とソフィア、景時、リュウの四人は、月曜日の朝に湯井岡市に到着した。
　この街はオルニアの首都であり、街のどこからでも紫政帝が住まいする明禅館を小高い丘の上に見ることができる。規模は大きいが、地味な建物だ。

　市民墓地は街の西側にあった。
　景時は、亡き両親の顔を思い浮かべる。
（父さん、母さん、これからはたぶん来られなくなるだろうけど、ごめんな。でも、父さんと母さんはいつもこの胸にいるから。一緒に来てくれてると思ってていいよね。）
　ソフィアも「市民の碑」の前に歩み寄った。
（カゲさんのお父様、お母様、大切に育てられたご子息をお預かりします。誠に申し訳ございません。これからもどうか見守っていてあげて下さい・・・。）

　それから、篤史がライランカ行きのフェリーのチケットを買いに行くと言って、三人を宿泊先に残して一人で出かけた。
「今から買っておかないと、特に一等船室は予約が取れないからね。」

　夕方、景時とリュウは篤史から制服着用を指示された。
「これから、紫政帝陛下にお会いするから、失礼のないようにな。」
「えっ？」
「驚いてる場合ではないぞ。彼女は王族だ。ご挨拶に行って当然だろう。藤原君、君もだ。もっともまだ実感が湧いていないかな。」
「あ、なるほど、そうであります。」

　明禅館に近づいていくと、一つの人影が表門の前にいるのが見えて来た。それはソフィアが見知った人物だった。
「風馬殿下！お久しゅうございます。」
「どうもご無沙汰致しております。ファイーナ様にはご機嫌麗しゅうございます。」

「殿下御自らのお出迎え、誠に恐縮に存じます。カゲさん、リュウ君、こちらはオルニアの皇太子殿下。」
「えっ？！」
　二人は一瞬あっけにとられたが、慌てて敬礼した。
「藤原景時です！」
「神崎リュウです！」
　風馬は、にこやかに二人を見た。
「初めてお目にかかります。皇太子の田所風馬です。加賀君とは、もう幾度もお目にかかっていますね。」
「はい、殿下。ご無沙汰いたしております。」
（実は、かなりの頻度で何年間も会っているのだがな・・・。）
　風馬は篤史と目を合わせた。
　彼も謙虚で礼儀正しい人物だった。それに今、彼の目の前にいるのは、そう遠くない未来にライランカ皇太子になる人物なのである。
「たしか、次期皇太子は、藤原君でしたね。貴方は近々私と同じ立場になられると伺っております。どうかよろしく。」
　あ、そういう事になるんだ、と二人は思った。そして、今までは薄ぼんやりとしていたものが急に現実味を帯びてきた。
（なんか、本当に凄いことになってきたみたいだ・・・。）

　紫政帝との面会も同様で、途中からは食事を共にした。紫政帝と風馬、ソフィアと篤史が語り合うのを、景時とリュウが見ているという時間が圧倒的に長かったが、紫政帝も風馬も、景時とリュウに気さくに話しかけてくれた。
「まぁ、二人ともわしたちにはもっと気楽にしていいんだよ。堅苦しゅうて敵わん。」
　紫政帝が言った。
（なるほど。ソフィア警視がおっしゃっていたのは、こういう事なんだ。）
　景時は思った。僕が皇帝陛下や警視正には遠慮してしまうように、僕が皇太子になったら周りから同じように遠慮されてしまうのだ。

　籠野では、リュウから電話で連絡を受けていた両親が四人を待っていた。
「ただいま。」
　リュウの声を聞いた両親は、すく出てきた。
「おかえり。元気なようね。」
　母親はまず息子を抱きしめた。それから、他の三人を丁重に家の中に案内した。部屋には、何となく異国情緒を感じるような香りが漂っている。前回ソフィアが訪れた時には無かった懐かしい香りだ。
「これは、クミナ茶の香り。それにサイユマゴの匂いもする・・・。」
「姫様のためにご用意いたしました。お懐かしいでしょう？今までもときどき作ってきたけど、リュウ、貴方ももうすぐ日常的に接することになる香りよ。」
　サシャが言った。クミナ茶はライランカ独特のお茶で、ハチミツが入っていて少し甘みがある。なお、大人だけで飲む場合には少し果実酒を入れる。今日も入れてあるようだ。
「この度は息子がお世話になりまして。あのあと話し合って、やはりライランカへ行くという結論にな

りました。どうかよろしくお願い申し上げます。」
　父親の京一が言った。我が子を警察学校に入れた時から、どこへ赴任になってもいいと覚悟していたが、妻の母国とはいえ異国への赴任は想定していなかった。だが、姫君直々の依頼で、しかも本庁となれば、とてもいい条件だ。
「こちらこそ、大切なご子息を遠くへ行かせることになって、本当に申し訳なく思っています。でも、彼はライランカに必要な人になったのです。」
「ファイーナ様・・・。息子をそんな風に言って下さって、嬉しゅうございます。」
　母は、いつのまにか頼もしくなった息子がを見た。（この子が・・・。）

三三. 赴任先

　剣術競技会から二週間ほど経ったある日、制服着用が義務付けられている特別朝礼で、篤史の手から各人に直接『黒い剣』が渡された。
「おめでとう！大切に使うようにな。」
　彼は一人一人にそう良いながら手渡していった。最後はセルジオ・カルル警部だ。
「おめでとう！しかし君には白くても黒くてもあまり変わらんかも知れんな。」
「いえ、大変な違いだと思っております！」
　セルジオは言った。
「春野君と今井君、二人から多くを学び、自分の至らなさを痛感しました。人が一人で学ぶことにはやはり限りがあります。他流から学びとることを、彼女たちは教えてくれたように思います。」
「そうか。ならば今後とも一層の精進をな。」
「は。」
　彼は新たな剣を受け取って下がった。

　篤史は改めて訓辞した。
「今、諸君が受け取った黒い剣は、何者にも染まらず左右されず正義を貫き、人の命を守り抜くための剣である。これから現場へと向かい、その剣を振るう時、その剣が何故黒く塗られているかを噛み締めてもらいたい。そして、現時点でそれを持つ者は君たちのみ。もしいつかどこかでその剣を見かけたならば、それは今ここに集っている誰かの教え子かもしれない。そういうように思って欲しい。」

　解散して、各人が剣を抜いてみると、刀身はやや青みがかった銀色に光っていた。
「はて、これは？」
「あ、それはのう・・・。」
　傍らにいた周公沢が口を開いた。
「その刀身は軽くて強靭なヤカジウムでできとるんよ。だから今までかかってしもうた。」
「博士、それは一体何なんですか？」
　光昭が尋ねた。彼も今までそんな材質の名前は聞いたことがない。
「ま、それを加工できる者はまだ限られておるから知らんのも無理はないがの。とにかく硬くて軽い。特別製や。こんなもんを二〇本も作ってくれなどと、紫政帝陛下も、しんどいこと言わはる。わしがどんなに苦心したか。」

「それじゃ、この剣は博士が全部・・・。」
　皆んなが公沢を取り囲んだ。そういえば科学の講義が終わった後、公沢と呉章英は食堂に出てくる以外は実験室に篭りっきりでいたかと思うと、何ヶ月も警察学校以外の何処かへ通い続けて、何かしているようだった。まさか新しい材質で全員分の剣を作っていたとは・・・。

　それから、篤史とソフィアは、訓練生一人一人を校長室に呼んで、面談していった。セルジオと光昭には、そのまま残留して指導してくれるよう頼んだ。二人はもともと警察官だったので、残るといっても何の変化もないのだが、二人とも残留を快諾してくれた。
「こんなにやりがいがある仕事はありませんよ。」

　今井はるかが呼ばれた。
「貴女にも本当はこのままここにいて欲しいのだけれど、本来は警部資格を持っている人でないと指導できないから・・・。」
　と、ソフィアは前置きした。
「一旦はこの近くの派出所に三年くらい勤めて、改めて警部資格を取って下さい。筆記試験は、私の講義内容で間に合うはずよ。アイユーブ警察庁所属にしておきます。」
「はい。本当にお世話になりました、ファイーナ様、加賀警視正。どうかお幸せに。」
「ありがとう。」

　ジェシカ・ティスードは、生まれ故郷の所轄署だ。
「貴女には、まだまだ親孝行ができる。そばにいて、活躍を見せてあげなさい。」
「はい。ご配慮ありがとうございます。」

　宮部淳一は、皇宮警察への配属を指示された。
「自分が、でありますか？！」
　彼は驚いた。口下手で気が利かない自分に、華やかな世界が務まるのかと心配したのである。
「君だから任せるんだよ。」
　篤史が言った。
「君は口が固い。剣の腕もたつ。皇帝陛下も皇太子殿下も、気さくな方々だ。そう堅苦しく考えなくていい。そうして、三年経ったら、警部の資格を取って、後進の指導にあたって欲しい。あそこにも最高クラスの技術が必要なんだ。」
「わかりました。」
「皇宮警察には、小久保君にも行ってもらうつもりだ。」
「え、美穂さん？」
　小久保美穂は、本来言語学者で、言語学を講義するためにこの学校に来たと聞いている。
「宮廷には外国からたくさんの人が来る。そんな時に、通訳もできる警察官がいたらいいわよね。皇太子殿下がそう言ってくださったの。」
　ソフィアも言った。今日ではもう世界の言葉はほぼ統一されているが、それでも各国で固有の言葉遣いがある。周公沢の言葉がそれだ。
「はぁ・・・。そうなんですか。」

淳一はまるで夢を見ているようだった。皇帝陛下のお側近くにお仕えするなどとは、考えもしていなかったのだ。
「まぁ、実際に務めてみれば分かるさ。」
篤史も微笑んでいる。やってみなきゃ分からない。それが淳一自身の根本思想であることを、篤史は知っていたのだ。

中林肇は、オルニア警察庁本庁の配属に決まった。彼は柔道が特技だということで、本庁から直接指名を受けたのである。

こうして全員の進路が定まった。あとは、卒業式を迎えるのみだ。

三四. 卒業式

訓練生たちは、卒業の日まで思い思いの日々を過ごした。そして、話題になるのはやはり誰がどこに行くかである。
困ったのは景時だ。彼はソフィアに尋ねた。
「みんな、誰がどこに配属されるかを話し合っています。僕はどう答えたらいいのでしょう？ライランカの皇太子になると答えていいのでしょうか・・・？しかし、それでは貴女が姫君だと言わなければなりません。」
ソフィアは答えた。
「貴方にそんな気遣いをさせてごめんなさい。私のことは卒業式の時に明かすつもりなのだけれど、それまではただ、ライランカに行くとだけ言っておいて。」
「わかりました。リュウとも打ち合わせます。」
「本当にごめんなさい。」

九月九日、卒業式の日・・・。
篤史、ソフィア、ナジブ、公沢、章英、そのほか警察学校職員全員が同席のもと、制服姿の訓練生たちが黒い剣を帯びて並ぶ。
ソフィアと篤史にとって、オルニア警察の制服を着るのはその日が最後になる。
（この制服ともお別れか・・・。体力尽きるまで着るつもりだったが、仕方あるまい。）
篤史はソフィアを見た。（君のためなら・・・。）

彼は最後の訓示を始めた。
「訓練生諸君、この度は卒業おめでとう。諸君は、現時点で最強の知識と技術を担う優秀な警察官となった。諸君らと共にこの二年間を過ごせたことを、私は誇りに思う。共に汗をかき、笑い、泣き、感動した仲間たちというのは、一生の財産である。たとえ離れていても、私たちは仲間だ。決して一人ではない。名残惜しいが、機会があったらまた会おう。また、職員の方々、私事で短期間で交代することになり、誠に申し訳ないが、後任のナジブ警視正は、話のわかる優秀な人物です。どうかよろしく頼みます。
それから、ソフィアについて、諸君にはずっと伏せていたことがある。これからは、彼女の話を聞い

て欲しい。私からは以上だ。諸君らの活躍を祈る。」

　ソフィアが進み出た。彼女も今朝は万感の思いで制服に袖を通した。
「皆さん、ご卒業おめでとうございます。これまで二年間、ご一緒に過ごせたこと、私にとってたいへん貴重な思い出となりました。私の本当の名前はファイーナ、ライランカ皇帝・アルティオの娘です。」
　もともと彼女のことを知っていた者を除くほとんどの者は、驚いて彼女を見た。（ソフィア警視が、ライランカのお姫様・・・？）
「私は病のため、あと少ししか生きられません。だから短期間で後継者を育てなければならなかった。折良く、紫政帝陛下が新しいカリキュラムで警察学校を運営されると聞き及び、その中で後継者を育てたいと思ったのです。そして、カゲさんを選びました。彼ならきっと素晴らしい皇帝になってくれるでしょう、」
　皆が一斉に景時のほうを見た。（彼がライランカの皇帝に・・・。）
「今まで黙っていて、本当にごめんなさい。でも、皆んなのことは忘れません。これからの活躍を期待しています。」

　彼女が話し終えて奥に引き返そうとした時、脇から大きな花束を抱えて来た人物がいる。大谷好子だった。
「好子！」
「ソフィア、今までお疲れ様。今日まではまだソフィアのままでいてちょうだい。」
「うん、うん！・・・」
　二人は泣きながら抱き合った。
「ごめん。君には黙って、彼女を呼んだんだ。」
　篤史が言った。一同はその光景にもらい泣きし、彼女が壇上から降りると、みな駆け寄ってきて、別れを惜しんだ。

　その後、ソフィアは長い時間をかけて好子にこれまでの経緯で伏せていたところを話した。好子は真剣な表情で話を聞いていた。
　そういえば、ライランカ人と結婚するからといって、長年勤めた警視正を辞するなんて、不可解なことだとは思っていた。普通なら、お嫁さん貰いましたで済む筈だ。しかし、相手が王女となれば母国を離れさせるわけにはいかない。なるほど、それで話の辻褄が合う。
「ライランカに帰っても、お手紙は頂戴ね。私たち、ずっとお友達なんだから。それとも、まさか貴女、加賀警視正だけいてくれればいい、なんて考えてるんじゃないでしょうねぇ？」
「まさかぁ！好子も冗談きついわね。・・・お手紙は必ず出すから。・・・きっと出すから・・・。」
「ほらぁ、また泣く。別れに涙は禁物だってば・・・。それに貴女、結婚するんでしょう？おめでとう！お幸せにね。・・・」
　そう言いながら二人は泣いた。
　好子は夜明け近くまで話し続け、ちぎれんばかりに手を振って帰って行った。

三五. ライランカへ

旅立ちの日、空は晴れていた。
篤史、ソフィア＝ファイーナ、景時とリュウの四人は、訓練生すべてを見送ったあとでの出発となった。
「それじゃ、ナジブ、皆んな、 あとを頼んだよ。」
篤史が言った。
「あぁ、任せとけ。君も元気でな。ファイーナ様、知らぬこととはいえ、ご無礼つかまつりました。どうか御身お大切に。藤原君と神崎君、君たちとは短い期間だったが、楽しい時間を過ごさせてもらった。元気でな。」
ナジブは温かい笑顔で見送った。
（まさか姫君だったとはなぁ。しかもあの堅物を絵に描いたような男が・・・世の中、分からん！）

港には次の日の午後四時頃に到着した。ライランカ行きの船はもう接岸していて、乗船可能だった。篤史が受付でチケットを見せる。
「はい、一等船室のスイート一枚とツイン一枚でございますね。」
（えっ、スイートって・・・それに、その二枚しかないの？）
ファイーナは胸が高鳴った。この場合、ツインは景時とリュウだと考えられる。そうすると、自分は篤史と同じ船室に泊まるしかないではないか・・・・。
係員が部屋の前まで案内してくれる。
「こちらが鍵でございます。出航までしばらくお待ちください。」
「どうもありがとう。」
ファイーナの動揺とは反対に、篤史は落ち着き払っている。
「それじゃ、六時にレストランで待ち合わせよう。」
彼は他の二人に言った。二人も、それが当たり前であるかのように早々に場を去った。

「さて、部屋に入ろうか。」
篤史は、戸惑うファイーナをエスコートして中に入った。スイートだけあって中は広く、バスルームやライティングデスクもある。だが、ファイーナが最も深く見つめたのは、ダブルベッドだった。
（やっぱり・・・！）
「あ、これか。やっぱり気になる？」
篤史は微笑んでいる。
「だって！」
ファイーナは耳元が熱くなっているのを感じた。篤史は、そんな彼女がまた愛おしくなって抱き寄せる。
「ファーニャ、僕たちはもう婚約してるんだ。構わないだろ？それに、これが君にとって一番の警護だと思うが。」
「貴方って、いつも強引なのね。初めてのキスも、プロポーズの時も、私の逃げ道を全て消してからだった。今だって、私が知らないうちにスイートルーム取って・・・。」
「君の言葉をひとつ訂正させてもらう。最初のキスは、何の用意もなかった。君の涙に負けただけだ。」
「もう、貴方って人は！どこまで私を蕩けさせれば気が済むの・・・。」
彼女は、彼の温もりの中で言った。

「ファーニャ、帰国するまでは君は姫君でなくていられる。僕は一人の女性としての君と結ばれたい。・・・愛してるんだ・・・それでも嫌かい？」
「篤史・・・。」
　二人は互いに見つめ合い、唇を重ねた。

　夕食後、景時とリュウはラウンジのバーにいた。二人とも、ファイーナと篤史をできる限り二人きりにしてあげたいと思っていたのだ。
　景時はすぐに酔い潰れた。
「しあわせに・・・なっ・・くださ・・そ・・けいし・・。」
　途切れ途切れの言葉をリュウは読み取った。
「景時、きみ・・・。」
　リュウはそのとき初めて景時の胸の奥深くにしまいこまれた思いを知った。
　景時は夜明け近くに目を覚ました。自分は船室のベッドに運ばれていて、そばにリュウがウトウトしているのが見えた。
「リュウ、君がここまで連れ帰ってくれたのか。」
「フッ、僕が将来の皇帝陛下を放っておくとでも思うか？」
「すまんな。」
「きっと僕はこういう時のために呼ばれたんだと思うよ。」
「ありがとう・・・。」

　やがて、船内アナウンスが出航を告げた。ライランカ、ファイーナの母国へ・・・。